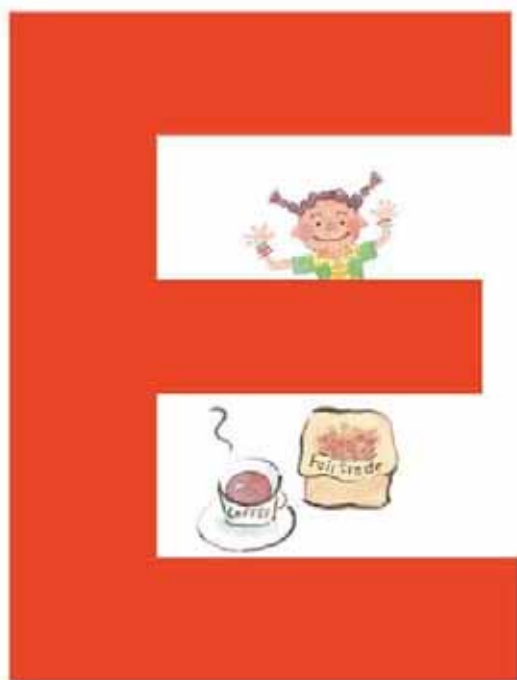


環境学習実践者向け E S D ガイドブック



E S D

はじめての一步

FIRST STEP FOR ESD



名古屋市



ESD はじめの一步

環境学習実践者向け ESD ガイドブック

はじめに

「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するユネスコ世界会議」が名古屋市で2014年11月に開催されました。この世界会議では、「国連ESDの10年」のふりかえりと今後の方策が話し合われ、最終日の閉会全体会合では、「グローバル・アクション・プログラム (GAP)」の発表と「あいち・なごや宣言」が採択されたほか、子ども会議参加者によるメッセージの発表がありました。メッセージは、子どもたちが自ら考え、話し合いを重ねて作り上げたもので、「ぼくは、リオ・サミットのセバン・スズキさんのスピーチを見ました。22年前と今が、何も変わっていないじゃないかと思いました」、「私たちは本気です。大人のみなさんも、本気になってESDに取り組んでください」といった言葉が深く私たちの心に響きました。

「なごや環境大学」との協働により本書を作成しました。なごや環境大学は、愛・地球博が開催された2005年に、市民・市民団体、企業、学校・大学、行政が協働でつくる、環境活動のネットワークとして開設され、今年で開学10周年を迎えます。本書の企画・構成については、なごや環境大学ESD推進チームのご協力をいただくとともに、実践編で述べる日頃の取組の改善方法については、講座企画者のみなさまから様々なアドバイスをいただき作成しました。

このガイドブックはテーマを、「情報をつなぐ」としており

- ① ESDについて知りたい方がその概要を知ることができ、
- ② さらに詳しい情報を得る場合にはどこを見ればよいか、
- ③ 様々な団体がどのような情報や教材などを出しているか、
- ④ どうすればESDになるのかという疑問に答えるためのヒントを紹介し、ESDに取り組みたい人の道しるべとなるようにしています。

2015年以降、世界中のESDの行動指針となる「グローバル・アクション・プログラム (GAP)」では、ESDを実践する教育者の養成やESDへの地域コミュニティの参加の促進などが優先行動分野として挙げられました。このことから、地域の環境学習や環境保全活動の場においても、それぞれの活動を通して知識・経験を伝えることに加え、これまで以上に、自ら考え・行動する人材育成につながる工夫が求められています。ESDの答えは一つではありませんが、本書がESDを進めるためのはじめの一步としての手助けとなり、持続可能な社会づくりのために、行動できる人が増えていくためのヒントとなれば幸いです。

ESD…Education for Sustainable Development

2015年3月 名古屋市環境局

目 次

ESD理解編

なぜ今ESDが必要なのか	
持続可能な開発（SD）	4
持続可能な開発のための教育（ESD）	8
SDとESDの動き	
SDとESDをめぐる主な動き	10
ESDが大切にしていること	
ESDの要素、育みたい力、つながり	14
ESDの事例 藤前干潟を守った名古屋市民	16
ESDユネスコ世界会議	
「あいち・なごや」での開催結果	18
岡山市での開催結果	20
ステークホルダーからの提言・宣言	21
ポスト2015	
あいち・なごや宣言	22
グローバル・アクション・プログラム（GAP）	23
国内における今後の動向	24

ESD実践編

導入	
ESDを行うには	25
ESDの手法	
ESDの3ステップと参加型学習	26
変化のための参加型 ー参加型の目的ー	28
参加型の学びを作ろう！	30
よりよい参加型を進めるためのポイント	34
気づきから行動へ ー社会への関心、効力感、スキルを育てよう！ー	39
具体的な行動	
持続可能な未来を実現する9つの方法	41
ESDのヒント	
既存の取組を改善して、取組の輪を広げる	44

ESD資料編

ESD実践に役立つ施設、ウェブサイト	51
取組紹介 ～私たちのESD～	59

ESD理解編

持続可能な開発(SD)

なぜ今ESDが必要なのか

私たちを取りまく 持続不可能な状況

地球温暖化、生物多様性の損失などの環境問題、エネルギー、貧困、人権、平和、食糧問

題など、現代社会に生きる私たちは、解決困難な問題を世界や地域の身近な所で抱えています。これらの問題は複雑につながりあっており、負のスパイラルとなって、持続不可能な状況を

生み出しています。社会全体の仕組みそのものを変えるような取組を行わない限り、持続可能な社会の実現は難しい状況にあります。

● 環境への負荷

人間活動が地球環境へ与える負荷(エコロジカルフットプリント)

現在の世界中の人々の生活に必要な地球の数 → 世界中が日本と同じ生活をした場合に必要な地球の数
1.5個 2.3個

出典：日本のエコロジカルフットプリント2012(WWFジャパン)、あいち生物多様性戦略2020(愛知県)

地球温暖化

この100年の年平均気温は、世界で0.69℃、日本で1.14℃、名古屋で2.1℃上昇している。この先、1℃の上昇するだけでも熱波、極端な降水などの「極端な気象現象」のリスクが高くなる。

出典：平成26年版環境・循環型社会・生物多様性白書(環境省)、名古屋市ウェブサイト

生物多様性

これまでのおよそ1,000倍の速度で生物が絶滅している。名古屋市内では哺乳類の約7割、両生類・は虫類の約6割の種が絶滅のおそれがある。

出典：平成26年版名古屋市環境白書(名古屋市)、名古屋市ウェブサイト

● 社会的な格差・矛盾など

エネルギー

エネルギー消費量は、世界の上位10か国が全体の65%を占め、そのほとんどが先進国

最貧国ではエネルギーの80%以上を薪などの伝統的なエネルギー源から得ている

食糧

世界中で8億人を超える人々が飢餓状態にある

世界の穀物生産高は、全人口の2倍の人口を養うことができる

貧困

地球に住む5人に1人に相当する12億を超える人々が、1日1ドル未満の所得で生活

裕福な1%の人々が、もっとも貧しい57%の人々と同じだけの所得を得ている

出典：ミレニアム開発目標 ともに生きる地球市民(外務省)

「ミレニアム開発目標(MDGs)」(詳細はP12)の実現に必要なお金と各種支出との比較

ミレニアム開発目標	金額(円)	現在の支出先との比較	金額(円)
1日1ドル未満で生活する人の割合を半減させる	6兆2000億～7兆1000億	世界の軍事費	116兆(2005)
栄養失調の子供の数を半減させる(飢餓人口の半減)	3兆4000億	ヨーロッパでのダイエツ用品購入額	5兆6600億(2004)
HIV/エイズの広がり食い止め、減少させる	2兆5400億	日本の防衛費	4兆8000億(2007)
安全な飲み水と衛生施設を利用できない人の割合を半減する	1兆1500億	世界のビデオゲーム購入額	2兆6400億(2006)
		世界のペットボトル飲料水購入額	11兆5000億(2006)

出典：NHK地球データマップ 世界の「今」から「未来」を考える(NHK出版)

持続可能な開発(SD)とは？

持続可能な開発(SD: Sustainable Development)とは、「将来のニーズを損なうことなく、現在のニーズを満たすような社会づくり」を意味していま

す。これは、環境と開発を互いに反するものではなく、共存し得るものとしてとらえ、環境保全を考慮した節度ある開発が重要であるという考えに立っています。これまで経済発展が優先されてきた中で、環境の保全、経済の

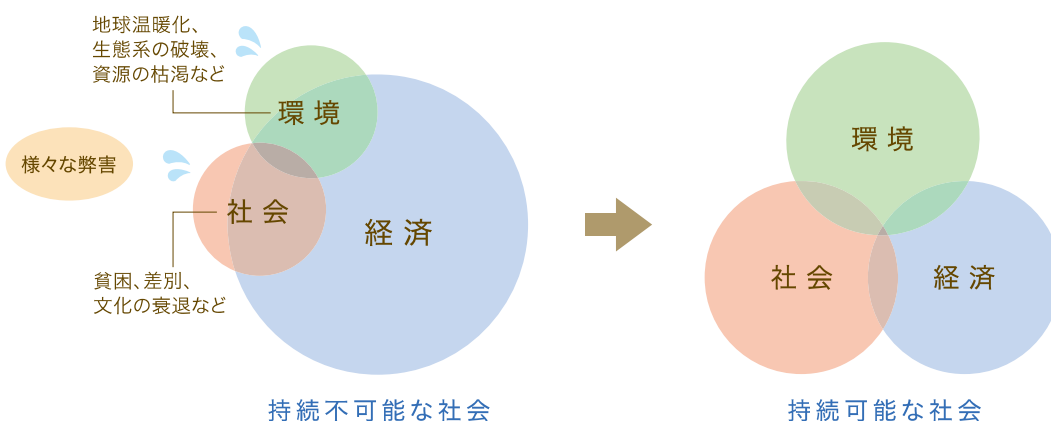
発展、社会の発展をバランスよく進めていくことが、持続可能な開発であると言えます。なお、持続可能な開発の「開発」は、「社会の構築」や「発展」などと表現されることもあります。

● 将来のニーズを損なうことなく、現在のニーズを満たすような社会づくり



出典: こども環境白書2015(環境省)

● 「環境の保全」、「経済の発展」、「社会の発展」のバランスの取れた社会づくり



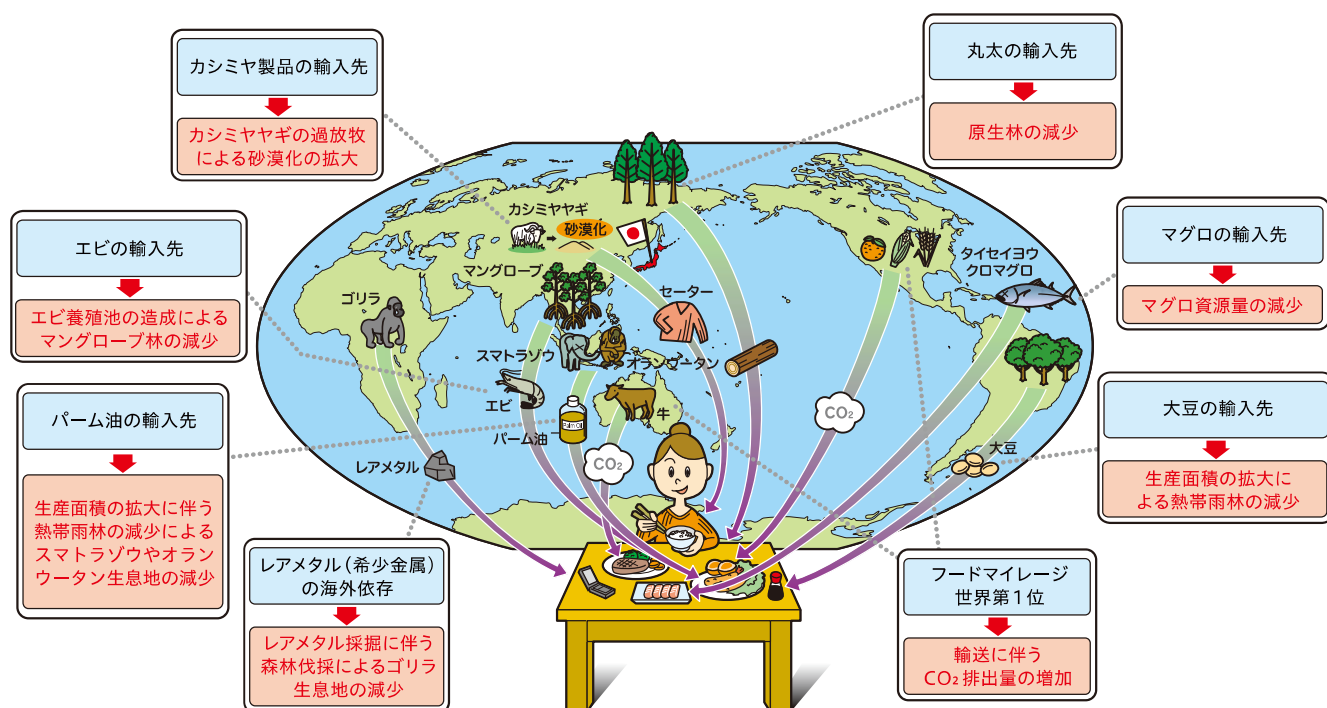
私たちの暮らしと世界の問題はつながっている

前のページに挙げたことは実感が伴わないように感じますが、遠い世界の話ではなく、私たちの生活と深く結びついています。交通網や情報通信網の広が

り、地球規模での経済活動や文化交流により、経済のグローバル化は一層進展しており、私たちの生活は物質的にも経済的にも豊かになりました。その一方で、食品やエネルギーなど、外国の資源に頼ることで、資源の輸入先の環境や人々の生活に大

きな影響を与えています。以下の図は一例ですが、このように私たちの暮らしと世界の様々な問題は表裏一体の関係でつながっています。逆に言えば、私たちの日ごろの行動や選択が、地域のみならず、世界を変えていくことにもつながっていくのです。

私たちの生活が世界に与える影響



出典：生物多様性なごや戦略2050（名古屋市）一部改変

図の解説（主なもの）

パーム油

アブラヤシを原料とするパーム油は、生産性が高く、安価で多用途に利用しやすいことから、食品、洗剤など様々な製品に使われています。世界の生産量の85%がインドネシアとマレーシアに集中しています。農園開発のために熱帯林が伐採され、スマトラゾウやオランウータンなどの生息地が減少するとともに、地域住民の労働環境などが問題となっています。

出典：使ってもいいの？暮らしの中のパーム油（WWFジャパン）、平成26年版環境・循環型社会・生物多様性白書（環境省）

レアメタル（希少金属）

携帯電話やパソコンなどには、小型化に大きく貢献するレアメタル（希少金属）が使われています。コンゴ民主共和国では、レアメタルの不法開発によりゴリラの生息地が脅かされるとともに、得られた利益が内戦を長引かせたと考えられています。

出典：産業構造審議会 産業技術環境分科会 廃棄物・リサイクル小委員会（第26回）資料（経済産業省）、WWFジャパンウェブサイト

エビ

日本で食べるエビの95%は東南アジアやオーストラリアなどから輸入しています。特に東南アジアでは養殖が盛んで、沿岸のマングローブ林を伐採してエビの養殖池が造成されています。名古屋市民が食べるエビの養殖池を造成するだけでも、ナゴヤドーム58個分の面積が必要です。

出典：生物多様性なごや戦略2050（名古屋市）

なごやの目指す 持続可能な未来

持続可能な社会づくりはそれ
ぞれの地域において、その課題・

特性に応じて考えられるもので
す。名古屋市では、環境面にお
いて、なごやの風土の特徴を踏
まえ、2050年を見据えて、
2020年までを期間とする「第3

次名古屋市環境基本計画」を策
定し、各種施策を展開していま
す。

2050年の環境都市ビジョン

土・水・緑・風が復活し、 あらゆる生命が輝くまち

2050年に向けて、なごやの自然、
地形、気候、歴史が織りなす風土を
活かし、すべての人が協働すること
によって、土・水・緑・風が復活して、
人も生きものもあらゆる生命が輝く
まち、日本のトップランナーとして地
球環境保全に貢献するまち（環境首
都なごや）を目指します。



活かす

なごやの風土

活かす

2020年目標

風土を活かし、ともに創る 環境首都なごや

なごやの風土の特徴

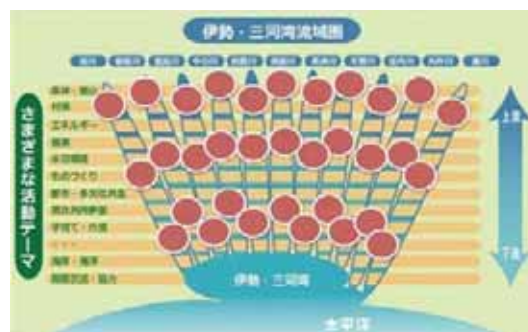
- ① 自然環境：日本の平均的な降水量により植物が育ちやすい気候、比較的大規模な樹林地・農地、身近な河川等がある
- ② 都市の成り立ちと歴史：充実した公共交通機関、広い道路、暮らしを支えてきた川の上下流交流の歴史
- ③ 暮らし・産業：ものづくりの伝統を活かした技術開発、先端的産業技術が集積
- ④ 人・コミュニティ：ごみ減量で培った協働とそれを支えるコミュニティ、愛・地球博とCOP10の経験

RCEとは？

RCE (Regional Centres of Expertise on ESD) とは、ESDを地域で実現していくための拠点として、国際連合大学が
2005年から世界中で推進・認定を行っているものです。2014年8月現在、世界中で129のRCEが認定されています。

中部ESD拠点

東海・中部地域のRCEとして、2007年に中部ESD拠点
(RCE Chubu) が設立されました。伊勢湾と三河湾に注ぎ込む
河川の流域全体を伊勢・三河湾流域圏（愛知・岐阜・三重県
とほぼ一致）と呼び活動対象地域としています。流域単位での
RCE認定は世界でも初の事例で、地域の持続可能な発展を妨
げる自然・経済・社会の諸課題を明らかにし、それらの解決
に向けた人材を育成するためのネットワークづくりを行なっ
ています。2014年11月のESDユネスコ世界会議では、ESD推
進の「流域圏ESDモデル（中部モデル）」の発信を行いました。
<http://chubu-esd.net/>



COLUMN

ESD理解編

なぜ今ESDが必要なのか

持続可能な開発のための教育（ESD）

持続可能な開発のための教育（ESD）とは？

持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）は、「一人ひとりが世界の人々や将来世代、また、環境との関係

性の中で生きていることを認識し、持続可能な社会の実現に向けて行動を変革するための教育」のことをいいます。「持続可能な社会を支える担い手づくり」という言い方もできます。

持続可能な社会を実現するためには、社会の問題をただ知っ

ているだけではなく、未来の世代、今生きている人々、環境などと自分とのつながりに気づき、問題解決のために具体的に行動できる人を増やしていくことが必要であり、ESDはそのための学びです。

● ESDの定義（主体別）

それぞれに表現の違いはありますが、いずれもESDを通じて「行動」や「新たな価値観」を生み出すことなどが共通のキーワードとなっています。

「国連持続可能な開発のための10年」関係省庁連絡会議、環境省

私たち一人ひとりが、世界の人々や将来世代、また、環境との関係性の中で生きていることを認識し、行動を変革することが必要であり、そのための教育がESDです。

出典：ESD実施計画（次ページ参照）

※本書ではこの表現を使用

日本ユネスコ国内委員会（文部科学省）

ESDとは、現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む（think globally, act locally）ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。

出典：日本ユネスコ国内委員会ウェブサイト <http://www.mext.go.jp/unesco>

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

ESDとは、社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出すことを目指す学習や活動です。

出典：ESD-Jウェブサイト <http://www.esd-j.org>

ESDはあらゆる主体や世代による学びあい

「持続可能な開発のための教育」の「教育」は、学校のみならず、社会教育、文化活動、社内研修、地域活動などあらゆる教育や学びが対象となっています。そのため、生徒、教員など

学校関係者だけでなく、地域住民、NPO・NGO、企業、行政など、あらゆる主体や世代においてESDを実践することが期待されています。持続可能な社会の実現には、多様な考え方や立場を理解し、より良い社会のあり方を探っていくことが重要であり、あらゆる主体・世代が対話

し、共に学びあうことが大切にされています。



ワークショップの様子（なごや環境大学）

ESDが扱うテーマは 多分野にわたる

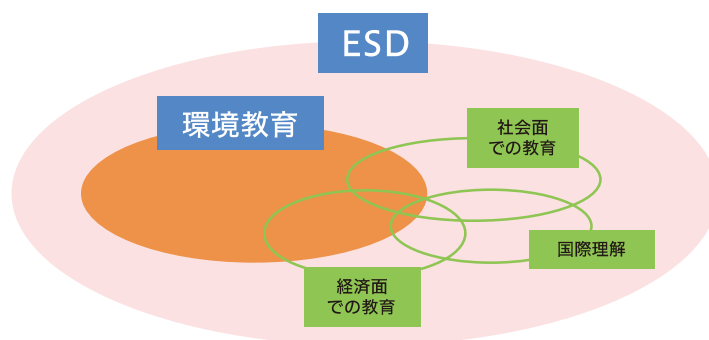
ESDが扱うテーマは、環境保全、人権、防災など多分野にわたります。

これまで貧困、人権、平和、環境、教育、福祉、多文化共生など様々なテーマに対しては、別々に取組が進められてきました。これらの様々なテーマについて、個別に取り組むのではなく、ESDをきっかけに持続可能な社会の実現という観点から個々のテーマをつなげ、総合的に取り組むことが重要です。

なお、従来の環境教育は、環境保全を基盤としていますが、ESDは、環境のみならず、経済、社会との関係性も重視されており、ESDは、広義の環境教育を含む、様々な教育を網羅しているといえます。



出典：ESDユネスコ世界会議あいち・なごや支援実行委員会リーフレット



出典：平成26年版環境・循環型社会・生物多様性白書（環境省）

CHECK

●我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画（ESD実施計画）

日本における「国連ESDの10年」に関する実施計画で、ESDの目標や課題、各主体に期待する役割、推進方策などを具体的に記述しています。

発行：「国連持続可能な開発のための教育の10年」関連省庁連絡会議

<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/index.html>

●わかる！ESDテキストブック シリーズ1

基本編 未来をつくる「人」を育てよう

ESDをこれから学ぼうとする人向けにわかりやすくESDを説明しています。

発行：「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

<http://www.esd-j.org/j/book/book.php?itemid=1840&catid=131>



●こども環境白書2015

主に小学校高学年以上を対象とした環境教育用の冊子です。2015年版はESDをキーワードに、様々な環境問題と向き合うためのヒントを紹介しています。

発行：環境省

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/kodomo.html>



ESD理解編

SDとESDの動き

SDとESDをめぐる主な動き

持続可能な開発（SD）が国際的に知られるようになったのは、今から約30年前の1987年のことでした。その15年後の2002年のヨハネスブルグサミットにおいて、日本が「国連持続可能な

開発のための教育の10年」（国連ESDの10年）を提案し、同年の国連総会において2005年から2014年の10年間を国連ESDの10年とする旨の決議案が満場一致で採択されました。

こうした海外の動きに連動して、日本国内、また名古屋でもSDとESDに関する重要な動きがありました。その関連性に目を向けてみましょう。

年	海外	国内	名古屋
1971 昭和46		環境庁発足	
1972 昭和47	国連人間環境会議（ストックホルム会議）	環境保全と開発は対立するものとして考えられていた	
1987 昭和62	ブルントラント委員会「Our Common Future 我ら共有の未来」の刊行	「持続可能な開発」の概念が取り上げられる	公害防止に加え、快適環境の保全・創造を目的とした計画。のちの「環境基本計画」の前進となる
1988 昭和63		開発と環境保全は相互補強的なものと考えられるようになった。また、世代間の公平が明確に定義された	なごや環境プラン 策定
1989 平成元			
1990 平成2			
1991 平成3			
1992 平成4	環境と開発に関する国連会議（地球サミット）		名古屋市公害対策局が環境保全局に組織変更
1993 平成5	「リオ宣言」や「アジェンダ21」が採択され、「気候変動枠組条約」と「生物多様性条約」の署名が開始された（詳細はP12㉔）	環境基本法 成立	
1994 平成6	SDの重要方針が数多く決まった、大きな転機となる会議	環境基本計画 閣議決定	楽しみながら、体験し、考え、学ぶ環境学習の拠点（詳細はP51）
1995 平成7			名古屋市環境学習センター（エコパルなごや）開館
1996 平成8	持続可能性という概念は、環境だけではなく、貧困、人権、平和などを含むとされた		名古屋市環境基本条例 制定
1997 平成9	「テサロニキ宣言」採択 環境と社会に関する国際会議（テサロニキ会議） 気候変動枠組条約第3回締約国会議（地球温暖化防止京都会議、COP3）	「京都議定書」採択	環境保全施策の基本となる事柄を定める
1998 平成10			前文には、「将来の世代に引き継ぐ責務」や「持続的発展が可能な社会をつくりあげていく」旨の決意が書かれている

年	海外	国内	名古屋
1999 平成11			藤前干潟の埋立計画中止 ごみ非常事態宣言発表 名古屋市環境基本計画 策定
2000 平成12	国連ミレニアムサミット、 国連ミレニアム宣言 採択 国際開発目標の共通の 枠組み(詳細はP12㉔)	環境面での 総合計画ができる	名古屋市環境保全局と 環境事業局が統合し 環境局に組織変更 環境デーなごや 開始
2001 平成13	「ミレニアム開発目標(MDGs)」がまとめられる	環境省 発足	
2002 平成14	持続可能な開発に関する世界首脳会議 (ヨハネスブルグサミット(リオ+10)) 日本が「国連ESDの10年」を提案		藤前干潟の ラムサール条約湿地登録
2003 平成15		環境保全活動・ 環境教育推進法 成立	
2004 平成16	ユネスコが主導機関となり推進		
2005 平成17	「国連ESDの10年」スタート		取組そのものがESD! (詳細はP52) なごや環境大学 開学
2006 平成18	愛・地球博(愛知万博)開催		
2007 平成19		「国連持続可能な開発のための 教育の10年」関係省庁連絡会議 設置	「自然の叡智」 がテーマ 
2008 平成20		ESD国内実施計画 策定	第2次名古屋市環境基本計画 策定
2009 平成21	ESD世界会議(中間年会合/ドイツ・ボン)	名古屋で開催。2050年までの長期目標、 2020年までの短期目標などを定めた「愛 知目標」、遺伝資源の利用から生じた利益 を公平かつ衡平に配分するための「名古 屋議定書」が採択された	
2010 平成22	生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)		
2011 平成23	MDGsに続くものとして、持続可能な 開発目標(SDGs)を作ることを決定 国連持続可能な開発会議(リオ+20)	ESD国内実施計画 改訂 環境教育等促進法 成立	なごや生物多様性センター 開設 第3次名古屋市環境基本計画 策定 
2012 平成24		「あいち・なごや宣言」採択 「グローバル・アクション・プログラム」発表 (詳細はP22)	
2013 平成25			
2014 平成26	ESDユネスコ世界会議(最終年会合)		
2015 平成27	「持続可能な開発目標(SDGs)」採択予定	ESD国内実施計画 改定予定	
2016 平成28	2015年以降の国際開発目標 (詳細はP12㉔)		環境学習等行動計画(仮称) 策定予定

① 環境と開発に関する国連会議（地球サミット）／1992年 ブラジル・リオデジャネイロ

「持続可能な開発」の理念のもと、環境と開発の両立を目指して開催された国連の会議。約180カ国から約10,000人の政府代表団が出席し、並行して行われた各種NGOの会合には約24,000人の代表が参加した史上空前の大会議。持続可能な開発の重要な方策が数多く決められた。

<成果>

① 環境と開発に関するリオ宣言の採択

環境と開発に関する国際的な原則を確立するための宣言。前文と27の原則から成っています。

リオ 27 原則 （分かりやすく表現したもの）

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1 あなたがキーマン | 15 予防しましょう |
| 2 汚さないで! | 16 汚した人が、費用を払う |
| 3 未来の人にも公平に | 17 予測評価すべし |
| 4 自然保護VS開発から、自然保護=開発へ | 18 自然災害は、助け合おう |
| 5 貧困、格差社会をなくそう | 19 事前に教えて! |
| 6 最貧国、影響を最も受けやすい国が優先 | 20 女性が不可欠! |
| 7 みんなで生態系を守ろう! | 21 若者よ 大志を抱け! |
| 8 人口を減らそう! | 22 先住民の文化の尊重 |
| 9 科学技術を広げ応用しよう | 23 占領下の人々の生活や天然資源を守ろう! |
| 10 みんなの参加 | 24 戦争はダメ |
| 11 環境法をつくろう | 25 平和&開発&環境は一体 |
| 12 各国、協力しましょう! | 26 平和的解決を |
| 13 被害者を守ろう! | 27 幸せの地球に |
| 14 有害物質の移転はダメ | |

出典：「生物多様性 私と地球を元気にする方法」(長谷川明子著 技報堂出版)

② アジェンダ21の採択

リオ宣言を実行に移すための行動計画(全40章)。第36章で持続可能な開発のためには教育が不可欠であると明記されました。また、この中の「教育」とは、公的教育以外の幅広い教育を指すものとされました。

③ 気候変動枠組条約の署名開始

④ 生物多様性条約の署名開始

⑤ 森林原則声明の採択

② ミレニアム開発目標(MDGs: Millennium Development Goals)／2001年

前年(2000年)の国連ミレニアムサミットで採択された国連ミレニアム宣言と1990年代に開催された主要な国際会議やサミットで採択された国際開発目標を統合し、1つの共通の枠組みとしてまとめられたもの。主として開発途上国において、貧困削減、保健衛生、教育等の分野で2015年までに達成すべき8つの目標とその実現のためのターゲット、進捗を測定するための指標が設けられています。

③ 持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)／2015年(予定)

ミレニアム開発目標(MDGs)の達成期限である2015年以降の国際開発目標。MDGsは主として開発途上国を対象としていましたが、SDGsはすべての国を対象としています。MDGsで積み残された課題に加え、2000年以降深刻化した新たな課題に対応した内容となる予定で、策定のための検討が進められています。(2015年9月の国連総会で採択予定)

企業にとってのESD

持続可能な社会は企業活動を行う上での基盤となるものであり、資源の枯渇や環境の変化は企業の存続すら危ういものにします。また、企業の社会や環境に与える影響が大きくなるにつれて、これまで以上に持続可能な社会に向けた取組が求められています。このため、企業においても持続可能な社会を支える担い手づくり、すなわちESDの取組が必要とされています。以下では、企業がESDを行う際に関係が深いキーワードについて説明します。

CSR（Corporate Social Responsibility 企業の社会的責任）

CSRとは、企業が経済や法律だけではなく、環境や社会など様々な事柄にも責任を果たすべきという考え方。企業は売上高や利益などの経済的側面で評価されてきましたが、加えて環境的側面と社会的側面の3つで評価していこうとするものです。積極的に社会的責任を果たす企業が、結果として市場において高い評価を得られるようになってきています。

出典：なごや環境ハンドブック（なごや環境大学実行委員会）

ISO26000（社会的責任に関する手引）

2010年に正式発行された、社会的責任に関するISO国際規格。認証を目的とした規格ではなく、手引き（ガイダンス）として利用されます。ISO26000は大小を問わずあらゆる組織を対象にしており、民間、公的、非営利のあらゆる種類の組織に役立つように意図されています。7つの原則と7つの中核主題が掲げられており、第7章の「意識の向上と力量の確立（7.4.1）」では、ESDの重要性について述べられています。

7つの原則

- 1 説明責任
- 2 透明性
- 3 倫理的な行動
- 4 ステークホルダーの利害の尊重
- 5 法の支配の尊重
- 6 国際行動規範の尊重
- 7 人権の尊重

7つの中核主題

- 1 組織統治
- 2 人権
- 3 労働慣行
- 4 環境
- 5 公正な事業慣行
- 6 消費者課題
- 7 コミュニティへの参画及びコミュニティの発展

ISO26000では、「社会的責任」を「組織が法令を順守して、関係者の意見をよく聞きながら本業活用・本業関連で実践する、社会・環境の持続可能な発展に貢献するための活動」としており、慈善活動などではなく、組織が本業を通じて実践する活動としており、企業にとっての社会的責任を捉えやすくしています。

出展：「CSR新時代の競争戦略 ISO26000活用術」（笹谷秀光著、日本評論社）

これらのキーワード以外に、ハーバード大学のマイケル・ポーター教授が提唱する企業と社会の共有価値を創造することを目指した「CSV（Creating Shared Value 共有価値の創造）」といった考えがあり、いずれもESDと深い関連性があります。

CHECK

- 環境教育事例集「企業が取り組む環境教育～ESDの普及に向けて～」(名古屋商工会議所)

名古屋商工会議所では、ESDに関わる様々な分野の中でも企業活動と関係の深い「環境教育」に焦点をあて、企業の取り組み事例を紹介する環境教育事例集を作成しています。

http://www.meisho-ecoclub.jp/?page_id=1361



ESD理解編

ESDが大切にしていること

ESDの要素、育みたい力、つながり

ESDを通じて、持続可能な社会づくりのために行動できる人を増やしていくためには、ESDが大切にしている要素、育みたい

力、つながりを意識して取組を進めていくことが必要です。こうした要素などについては、様々な表現の仕方がありますが、ここ

では国立教育政策研究所がまとめた分類例を参考に、ESDを行う際に意識すべきポイントを紹介します。

ESDの要素（「持続可能な社会づくり」の構成概念）（例）

ESDの要素を学習者が意識し、そこから課題を見出すためのきっかけづくりを行う

取り巻く環境などに関すること	
① 多様性（いろいろある）	多様な事や物から社会は成り立っている （学習内容例）多様な文化がある
② 相互性（関わりあっている）	人や物の関わりあいで社会は成り立っている （学習内容例）自然界は様々な生物のおかげで成り立っている
③ 有限性（限りがある）	資源やエネルギーには限りがある （学習内容例）ウナギが食べられなくなってきた
意思や行動に関すること	
④ 公平性（一人一人大切に）	権利の保障やめぐみが公平に得られる （学習内容例）豊かな人がいる一方で搾取されている人がいる
⑤ 連携性（力を合わせて）	多様な主体が状況に応じて互いに協力する （学習内容例）地域の人々が協力して、災害の防止に努めている
⑥ 責任性（責任を持って）	一人ひとりの責任と義務を自覚して行動する （学習内容例）地域のために一生懸命、頑張っている人がいる

ESDで育みたい力（能力・態度）（例）

ESDで育みたい力を学習者が身に付けられるように意識する

① 批判的に考える力	（例） ☒ 得られた情報をそのまま鵜呑みにする ☐ 他者の意見や情報をよく検討・理解して取り入れる
② 未来像を予測して計画を立てる力	（例） ☒ 無計画、その場しのぎで物事を進める ☐ 見通しや目的意識をもって計画を立てる
③ 多面的、総合的に考える力	（例） ☒ 役に立たないものは不要だと考える ☐ 廃棄物も見方によっては資源になると考える
④ コミュニケーションを行う力	（例） ☒ 他者の意見を聞こうとしない ☐ 自分の考えに、他者の意見を取り入れる
⑤ 他者と協力する態度	（例） ☒ 自分のことしか考えない ☐ 相手の立場を考えて行動する
⑥ つながりを尊重する態度	（例） ☒ 自分は一人で生きていると思い込む ☐ いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する
⑦ 進んで参加する態度	（例） ☒ 他人の批評・批判ばかりして自分では動かない ☐ 自分の言ったことに責任を持ち行動する

ESDで大切な「つながり」(例)

「ESDの要素」、「ESDで育みたい力(能力・態度)」を学習者が身に付けられるように、以下のような「つながり」を大切にして教え方や学び方を改善することが必要です

① 物事、課題などのつながり

- (例)
- 環境と貧困など他の課題とのつながり
 - 地域と世界などの空間的なつながり
 - 自分たちの生活と課題のつながり

② 人のつながり

- (例)
- 学習者どうしのつながり
 - 地域と遠い世界の人々とのつながり
 - 多様な立場の人々とのつながり
 - 将来世代や過去世代とのつながり

③ 能力・態度のつながり

- (例)
- 異なる活動の場とのつながり
 - 学習と活動とのつながり
 - 家庭や地域社会とのつながり
 - 継続的・実践的なつながり
 - 現実的な問題解決とのつながり

▶ こうした要素などは、他にも様々な表現で述べられています

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議(ESD-J)

ESDが大切にしている「価値観」

- 人間の尊厳はかけがえない
- 私たちは社会的・経済的に公正な社会をつくる責任がある
- 現世代は将来世代に対する責任を持っている
- 人は自然の一部である
- 文化的な多様性を尊重する

ESDを通じて育みたい「能力」

- 自分で感じ、考える力
- 問題の本質を見抜く力／批判する思考力
- 気持ちや考えを表現する力
- 多様な価値観をみとめ、尊重する力
- 他者と協力してものごとを進める力
- 具体的な解決方法を生み出す力
- 自分が望む社会を思い描く力
- 地域や国、地球の環境容量を理解する力
- みずから実践する力

出典：わかる！ESDテキストブックシリーズ1基本編 未来をつくる「人」を育てよう(ESD-J)

日本ユネスコ国内委員会

育みたい力

- 持続可能な開発に関する価値観(人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重等)
- 体系的な思考力(問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方)
- 代替案の思考力(批判力)
- データや情報の分析能力
- コミュニケーション能力
- リーダーシップの向上

出典：日本ユネスコ国内委員会 <http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm>

CHECK

- 学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究[最終報告書](平成24年3月 国立教育政策研究所 発行)
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_saishuu.pdf

多様な主体の協働のもと ごみ減量を達成

名古屋市港区の藤前干潟。野鳥観察の拠点としても知られるこのエリアは、かつてごみ埋立処分場問題で揺れた場所だったということを経験している人も多いのではないのでしょうか。この事例こそがまさにESDといえるもののなのです。

1981(昭和56)年、藤前干潟の一部が、名古屋港港湾計画の変更により、廃棄物処理用地等として位置づけられました。本市のごみ処理量は増え続け、1998(平成10)年には年間100万トンに迫り、焼却・埋立処理能力の限界を迎えていました。藤前干潟が渡り鳥の重要な飛来地であったため、市民の間に埋立中止

を求める声が高まっていきました。

市は、「快適で清潔な市民生活」と「自然環境の保全」との両立をいかに図るかという観点から、市民と議論した末、1999(平成11)年に埋立計画を中止。また同年2月に「ごみ非常事態宣言」を出し、市民・事業者へ名古屋のごみ処理の窮状を伝え、2年間に20%、20万トンという大幅なごみ減量を訴えました。そして、分別の周知徹底、新資源収集といったごみ減量施策を実施した結果、「ごみ非常事態宣言」に掲げた目標を達成しました。

これは、一人ひとりがごみ減量を自らの問題と捉え、行動した結果です。2002(平成14)年には、国際的に重要な湿地とし

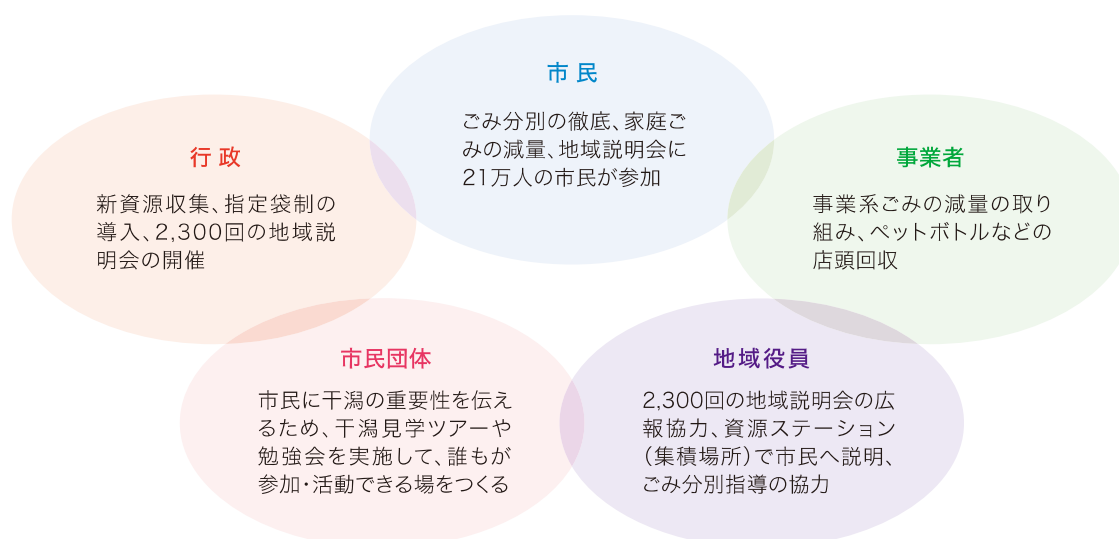


庄内川・新川・日光川が流れ込む伊勢湾奥部に残されている干潟。飛来していたシギ・チドリなどの渡り鳥は、約100haの藤前干潟をよりどころにしている。

て「ラムサール条約」に登録され、現在では環境学習の場となっています。

「鳥か、ごみか」の二者択一ではなく、「鳥も、ごみも」と共存を図るため、市民や地域役員、事業者など多様な主体が立ち上がり、「どうしたら名古屋の問題を解決できるか」をそれぞれの立場で考え、協働して取り組んだこの出来事こそ、まさに名古屋を代表するESDの事例といえます。

ごみ非常事態宣言当時の各主体の行動



● 1981(昭和56)年7月

名古屋港港湾計画で西1区
(藤前干潟の一部)が105haの
廃棄物処理用地等として位置づけ

● 1991(平成3)年3月

環境庁が鳥類保全の
観点から計画の縮小を指示

● 6月

名古屋市議会に埋立中止請願書と
10万人の署名が提出

● 1993(平成5)年12月

埋立面積を46.5haで
事業実施を決定

● 1994(平成6)年1月

環境影響評価手続が開始

● 1999(平成11)年1月

藤前干潟の埋立計画を中止

● 2月

ごみ非常事態宣言
2年間で20%、20万トン削減の
目標を立てる

● 5月

空びん、空き缶の資源収集を
名古屋市全域に拡大

● 2000(平成12)年8月

プラスチック製、紙製容器包装の
新資源回収開始

● 2001(平成13)年3月

ごみ非常事態宣言の目標達成

● 2002(平成14)年11月

ラムサール条約の「国際的に
重要な湿地」として登録

● 2005(平成17)年3月

「藤前干潟協議会」の設置
「なごや環境大学」の開校

「稲永ビジターセンター」・
「藤前活動センター」が開館

現在は貴重な環境学習、
憩いの場になっている

この事例に含まれるESDの要素(一例)

多様性	藤前干潟については、多様な立場や考えがある
相互性	人と自然は相互に関わりあっており、 自分たちの生活と環境は密接につながっている
有限性	ごみの処理能力、埋立には限界がある
公平性	どちらかの利益を考えるのではなく、 「鳥も、ごみも」公平な立場で取り組む
連携性	ごみ減量に向けてみんなで協力する
責任性	干潟を後世に残すため、ごみ減量に進んで取り組む

この事例で育まれた能力・態度(一例)

批判的に考える力	干潟の埋立をめぐる出た様々な意見や情報を よく検討・理解して取り入れる
未来像を予測して 計画を立てる力	干潟の美しさ、豊かさを 後世に残すため計画を立てる
多面的、総合的に 考える力	干潟の保全だけでなく、原因となるごみについて 多面的に考える
コミュニケーションを 行う力	干潟の埋立反対あるいは、埋立の必要性を一方的に 訴えるのではなく、他者と話し合い、 他者の意見を取り入れる
他者と協力する態度	市民や事業者など多様な立場の人が、 干潟保全のためにごみ減量に協働して取り組む
つながりを尊重する態度	自分が捨てているごみが干潟の問題につながる
進んで参加する態度	ごみ減量に積極的に取り組む

この事例で生まれたつながり(一例)

物事、課題などの つながり	- 自分が捨てるごみと干潟とのつながり - 干潟へ渡来する渡り鳥を通じた世界とのつながり
人のつながり	- 市民、市民団体、学校、事業者、地域役員、 商店街などが協働してごみ減量に取り組む - 干潟の保全に取り組む国際NGOや他分野の NPO等様々な関係者の連携
能力・態度のつながり	- 干潟の保全、活用を地元市民や市民団体、 研究者、行政などが一緒に話し合う 「藤前干潟協議会」の設置 - エコツアーの実施など、多くの人々に環境学習の 機会の提供の場として干潟を活用

ESD理解編

ESDユネスコ世界会議

「あいち・なごや」での開催結果

ESDユネスコ世界会議 名古屋で開催

「国連ESDの10年」の活動の

振り返りと、今後の方策を議論
するため、ESDユネスコ世界会
議のうち、「閣僚級会合及び全体
の取りまとめ会合」が愛知県名古

屋市の名古屋国際会議場で開催
されました。

ESDユネスコ世界会議 ～閣僚級会合及び全体の取りまとめ会合～

主催：ユネスコ、日本政府 期間：2014年11月10日～12日 会場：名古屋国際会議場
参加人数：153か国・地域、1,091人(ユネスコ加盟国の政府代表、ステークホルダー会合(岡山市)参加者など)

<プログラム>

11月10日(月)

- 開会全体会合
 - 皇太子殿下おことば
 - 開会あいさつ：
イリナ・ボコバ ユネスコ事務局長、下村博文 文部科学大臣、大村秀章 愛知県知事
 - キーノートスピーチ：ララ・ハスナ モロッコ王女 モハメッド6世環境保護基金代表
 - 閣僚級からのコミットメントの発表
- ハイレベル円卓会議(閣僚級会合) ● ワークショップI



ハイレベル円卓会議(閣僚級会合)



ワークショップ

11月11日(火)

- 全体会合II
- ワークショップII・III

11月12日(水)

- 全体会合III ● ワークショップIV
- 閉会全体会合
 - あいち・なごや宣言の発表と採択
 - ESDに関するグローバル・アクション・プログラム(GAP)の発表
 - ESDあいち・なごや子ども会議からのメッセージ発表 など



開会全体会合

会議の成果

- あいち・なごや宣言の採択(詳細はP22)
- グローバル・アクション・プログラム(GAP)の発表(詳細はP23)
- 「ユネスコ/日本ESD賞」創設の正式発表

GAPの5つの優先行動分野のうち、1つ以上の分野で活発に活動している個人または団体を表彰する
(1件あたり5万米ドル。毎年3件を表彰)

フォローアップ会合

世界会議が行われた名古屋国際会議場で、世界会議終了の翌日に日本国内のESDに関わる学校関係者、NGO/NPO、企業、その他多様なステークホルダーが集まり、世界会議の成果を共有するとともに、2015年以降のESD推進方策について議論が行われました。

- 期間：2014年11月13日(木)
- 主催：文部科学省 共催：環境省、外務省
- 会場：名古屋国際会議場
- 参加人数：300人以上

子どもたちが学び、話し合う 会議が実施される

ESDユネスコ世界会議の開催に併せて、愛知県内の小中学生が中心となり、持続可能な社会づくりに向けて学び、話し合う「ESDあいち・なごや子ども

会議」が、2014年7月から11月まで現地学習、グループ討議、全体会議などの構成により実施されました。世界会議最終日の閉会全体会合では、子どもたちがESDの大切さを訴えるとともに、大人たちに向けたメッセージを発表しました。



閉会全体会合でのメッセージ発表

ESDあいち・なごや子ども会議からのメッセージ（閉会全体会合でのスピーチ）

私たちが考える「持続可能な社会」は、「未来を考え、お互いを思いやり、人間だけでなくすべての生き物が共に、幸せに生きる社会」です。差別も不安もなく、平和で安全に、楽しく生活できる社会にしたいです。

しかし、今、私たちが生きている社会は、資源やエネルギーを無駄づかいし、自然環境を破壊しています。世界のどこかで戦争がおこっています。地域の伝統文化を伝えることが難しくなっています。防災対策をしている人が限られています。たくさん問題があって、「持続可能な社会」とは言えません。そして、こういった問題は、すべて、人とつながっていることがわかりました。「持続可能な社会」づくりを難しくしているのは、

- とどまることを知らない人間の欲、自分勝手さ、わがままな気持ち
- 人々の意識や関心が低く、知識が少ないことなのです。

いろいろな問題の原因をつくっているのは人間ですが、それを解決していくのも人間です。「持続可能な社会」をつくるために、私たちは、次のことを実行します。

- まだ知らないことがあるので、もっと現状を学びます。調べ、考え、参加します。
- たくさんの人に知ってもらい必要があるので、ESDを学校や地域の人に伝えます。
- 身近に出来ることは提案し、行動し、実行します。
- 命を大切に、人と人とのつながりを深め、交流します。

ここで、子ども会議から、大人の方々に、次のことを提案します。

- 戦争をしないでください。武力で解決しようとしないでください。
- 世界の人々が協力して、どの国の人も教育が受けられる環境をつくってください。
- 子ども会議のような、学び、考え、話せる場をもっとつくってください。大人もESDに興味を持って参加してください。
- 知識も経験もある大人が、もっと私たちに教えてください。
- 多くの人にESDを広めてください。ESDの考え方を広めて、今ある法律を変えてください。
- 地域の人たちともっと交流してください。
- 未来に目を向けて考えてください。当たり前のことを大切にしてほしいのです。子どもができて大人にできないわけがないと思います。

子ども会議の私たちが考える「ESD」とは、「未来を考えて、行動すること」です。みんながESDの主人公となって、今、これから、未来に向かって、ESDに取り組んでいきます。

ぼくは、リオ・サミットのセバン・スズキさんのスピーチを見ました。これを見てぼくは、22年前と今が何も変わっていないんじゃないかということを思いました。

私たちは本気です。

大人の方々も、本気になってESDに取り組んでください。ESDは、この世界の未来にとって一番大切なものではないでしょうか。

2014年11月12日

ESDあいち・なごや子ども会議 参加者一同

ESD理解編

ESDユネスコ世界会議

岡山市での開催結果

約1,800人が参加した ステークホルダー会合

愛知県名古屋市での「閣僚級
会合及び全体の取りまとめ会合」

に先立ち、岡山市において、世
界各国のユネスコスクール関係
者、ユース、ESD実践者など約
1,800人が参加したESDユネス
コ世界会議に関連するステーク

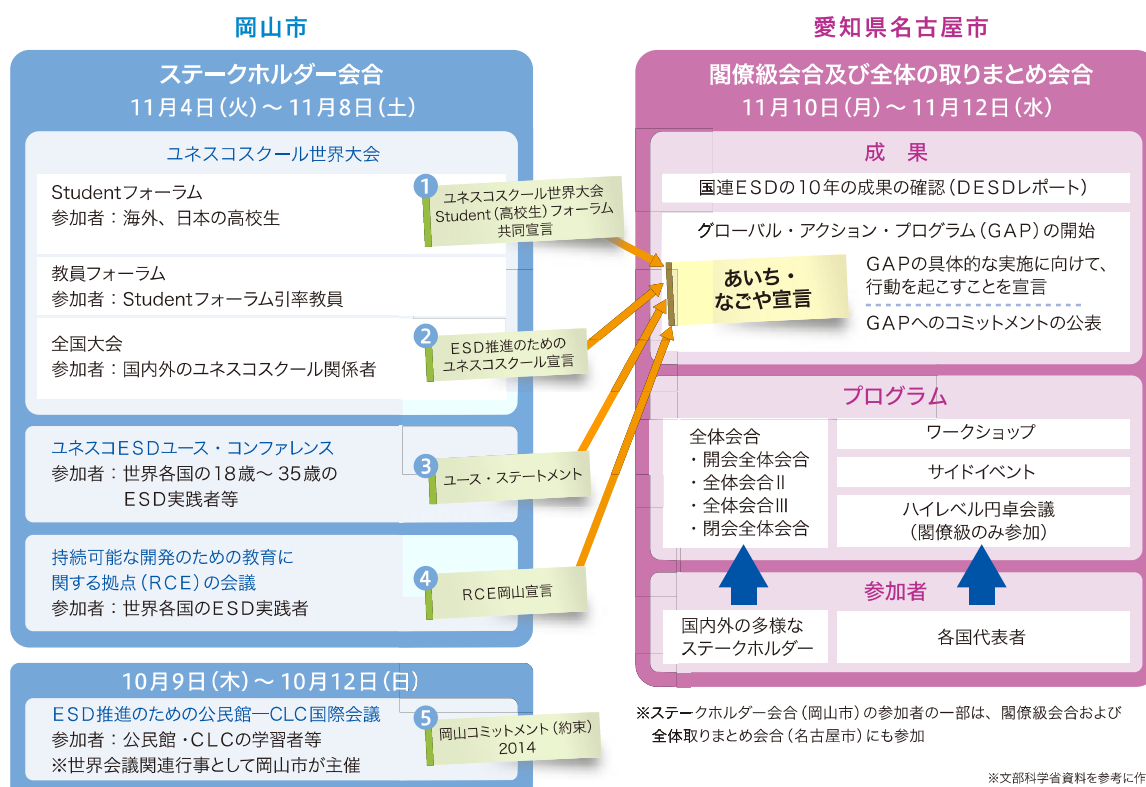
ホルダー会合が開催されまし
た。ここでの成果は「閣僚級会合
及び全体の取りまとめ会合」に反
映されました。

ステークホルダー会合の成果

- ① ユネスコスクール世界大会 Student (高校生) フォーラム共同宣言**
…高校生の立場から現在と未来において、ESDについて発信するなど、できることとなすべきことをまとめたもの。
- ② ESD推進のためのユネスコスクール宣言 (ユネスコスクール岡山宣言)**
…ESDをこれからも進めるといった日本のユネスコスクールとしての宣言と、
ユネスコスクールからの学校全体でESDを進めるといった提言をまとめたもの。
- ③ ユース・ステートメント**
…ユースが他のユースを支援するなどのユースとしてやるべきこと、ユースの参加促進に向けて必要なことをまとめたもの。
- ④ RCE岡山宣言**
…RCEとして「国連ESDの10年」後もGAPの促進を通じてESDを推進していくことなどの宣言。
- ⑤ 岡山コミットメント (約束) 2014**
…公民館・CLCなどの施設・機関において営まれるコミュニティに根ざした学びを通して、
ESDを継続・拡大していくための約束。

出典：ESDポータルサイト (文部科学省HP内) (<http://www.esd-jpnatcom.jp/conference/result/>)

ESDユネスコ世界会議 愛知県名古屋市と岡山市の会議概要



ESD理解編

ESDユネスコ世界会議

ステークホルダーからの提言・宣言

ESDユネスコ世界会議の開催に合わせて、様々なステークホルダーから、2015年以降もESDを強力に推進していくための提言・宣言が出されました。

「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム

●「ESDの10年・地球市民会議」からの提言（以下、骨子抜粋）

- 1 ESDの取り組み方や教材、支援の情報を共有し、誰もが利用・活用できる仕組みをつくりましょう
- 2 さまざまなESD実践に光をあて、互いにほめる仕組みづくりに取り組みましょう
- 3 ESDの視点を持ったコーディネーター（つなぐ人）が、積極的に活躍できる場をつくりましょう
- 4 地域ぐるみでESDに取り組むために、自治体のリーダーシップで多様な市民が参加する仕組みを強化しましょう
- 5 地球的課題を解決するために、世界との学びあいと連携を積極的に進めましょう

出典：「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムウェブサイト（<https://www.desd.jp/>）

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

● 市民によるESD推進宣言

● 地域と市民社会からのESD提言（以下、骨子抜粋）

地域全体で ESDを進める	提言 1 地域コミュニティと学校との連携によるESD推進 提言 2 ESDコーディネーターの育成、活躍できる場づくり 提言 3 地域全体で“持続可能な地域・社会”のビジョンづくり
教育改革を 進める	提言 4 学習指導要領への明記 提言 5 教員養成課程や、教員研修にESD研修を導入 提言 6 「持続可能な経済教育」の開発
ユースの 参画を進める	提言 7 高等教育機関で、社会課題に参画するESDを推進 提言 8 ユースの参画の保障
ESD推進の 仕組みをつくる	提言 9 ESD実践組織へのインセンティブ付与による横展開の促進 提言 10 ESD推進のための多様な財源づくり 提言 11 地域の多様な主体が参画する「地域ESD協議会」の形成 提言 12 広域レベルのESD推進拠点による地域のESD支援 提言 13 国レベルのマルチステークホルダーによる「ESDナショナルセンター」の形成

出典：ESD-Jウェブサイト内「地域が牽引するこれからのESD」（http://www.esd-j.org/j/documents/esd_citizen's_initiative.pdf）

「ESD企業の集い」参加企業有志一同

● 企業によるESD宣言

……………日本の企業によるESDとは何かを示し、その行動指針をとりまとめたもの。

出典：ESD-Jウェブサイト内「企業によるESD宣言」（http://www.esd-j.org/j/documents/esdj_kigyo_ja_web.pdf）

発起人団体（開発教育協会、公害地域再生センター（おおぞら財団）、さっぽろ自由学校「遊」）および、賛同団体（26団体）

● 持続可能な開発のための教育（ESD）政策への市民参加に関する提言

……………ESDに取り組む市民社会として、ESDに関連する政策プロセスへの市民参加についての提言。

※愛知県はアジア保健研修所（AHI）、名古屋NGOセンター、NIED・国際理解教育センターの3団体が賛同団体

出典：開発教育協会ウェブサイト内「DEARの政策提言活動」（http://www.dear.or.jp/org/advocacy2014_esd_final.pdf）

あいち・なごや宣言

あいち・なごや宣言の
発表と採択

ESDユネスコ世界会議の閉
会全体会合では、「あいち・な
ごや宣言」が採択されました。
「ESDに関するグローバル・ア

クション・プログラム(GAP)」
(後述)の具体的な実施に向け
て、様々なステークホルダーが
ESDの取組をさらに強化し、そ
のための行動を起こすことを宣
言したものです。この宣言は、
全部で16項目あり、国連ESD

の10年の成果、ESDユネスコ世
界会議及び岡山市で開催された
ステークホルダー会合、さらに
その他の関連イベントや協議プ
ロセスの審議に基づきまとめら
れました。

あいち・なごや宣言

書かれていること

- ESDの重要性を確認
- 「国連ESDの10年」の成果を総括
- GAPの実施に向けてすべてのステークホルダー、加盟国、ユネスコへ呼びかけ



「あいち・なごや宣言」英語版

主なポイント(キーワード抽出) ※各項目最後の括弧書数字は宣言における項目番号です。

- GAPがすべてのレベル及び分野においてESDの導入、拡大を目指していることに留意する(4)
- ESDを極めて重要な方法として再認識する(5)
- ユネスコ/日本ESD賞の創設を評価する(7)
- 社会を変容させる力を与えるESDの可能性を重要視する(8)
- ESDは、先進国と発展途上国の両方が努力の強化に取り組む機会であり、責任である(9)
- ESDの実践は、地元、国内、地域、世界の文脈を十分に考慮すべきである(10)
- GAP開始の推進力の構築及び維持する(12)
- 全てのステークホルダーが、モニタリング及び評価の方法を強化するよう求める(13)
- ユースをキーとなるステークホルダーとして巻き込み、尊重しながら意思決定及び能力育成を強化するために、すべてのステークホルダーの従事を促進する(14)
- ユネスコ加盟国の政府に以下のような更なる取組を求める(15)
 - a) ESDの統合を強化し、教育・訓練・職能開発政策へ十分にESDを取り入れる
 - b) GAPの5つの優先行動分野に沿った政策を行動に移すための実質的な資源を配分、結集
 - c) ポスト2015年アジェンダ及びそのフォローアッププロセスにESDを反映、強化
- ユネスコ事務局長に以下のことを求める(16)
 - a) グローバルリーダーシップ、政策の共同作用を支援、コミュニケーションの円滑化
 - b) 新たなモメンタム(勢い)の構築、パートナーシップやネットワークの活用、動員
 - c) 資金を含む適切な方策を支援

CHECK

- 「あいち・なごや宣言」全文

http://www.esd-jpnatcom.jp/conference/result/pdf/Aichi-Nagoya_Declaration_ja.pdf

世界でESDを
推進するための方針

「ESDに関するグローバル・
アクション・プログラム(GAP)」
とは、国連ESDの10年の後継プ

ログラムで、2015年以降のESD
の取組を世界中で推進・拡大して
いくための新たな指針です。

GAPは2013年11月の第37
回ユネスコ総会で採択されたの
ち、ESDユネスコ世界会議で正

式に発表され、2014年の第69
回国連総会で提出・決議されま
した。

GAPの全体目標

持続可能な開発に向けた進展を加速するために、
教育・学習の全てのレベル・分野で行動を起こし拡大すること(6)

2つの目的

全ての人が、持続可能な開発に貢
献するための、知識、技能、価値
観、態度を習得する機会を得るた
め、教育・学習を再方向付けること
(6(a))

持続可能な開発を促進する全ての
関連アジェンダ・プログラム・活動
において、教育・学習の役割を強化
すること(6(b))

5つの優先行動分野

① 政策的支援(ESDに対する政策的支援)(8)

ESDのアクションをスケールアップするためには、それを可能にするような政治環
境が重要である

② 機関包括型アプローチ(ESDへの包括的取組)(9)

教授内容や方法論の再方向付けだけではなく、コミュニティにおける機関と持続可
能な開発のステークホルダーとの協力と同様、持続可能な開発に則したキャンパス
や施設管理においても求められる

③ 教育者(ESDを実践する教育者の育成)(10)

教育者は、教育変革を促し、持続可能な開発を学ぶ手助けするために最も重要な
「てこ」の一つである

④ ユース(ESDへの若者の参加の支援)(11)

ユースは、彼ら自身及びこれからの世代のためによりよい将来を形作ることに、深く
関係している

⑤ 地域コミュニティ(ESDへの地域コミュニティの参加の促進)(12)

持続可能な開発の効率的・革新的解決策は、しばしば地域レベルで開発されている

※上記・右記の各項目最後の括弧書数字は、GAPにおける項目番号です。

CHECK

● GAPの全文

<http://www.mext.go.jp/unesco/004/1345280.htm>

左記以外の主なポイント
(キーワード抽出)

【序論】

- 全てのレベルの行動によってESDの可能性を最大限に引き出し、万人に対する持続可能な開発の学習の機会を増やすことが必要で、GAPはこの行動を生み出すためのもの(1)

【原則】

- ESDは、学習者が持続可能な開発の行動へと駆られるような、革新的な参加型教育及び学習の方法を必要とする(5(b))
- ESDは教育及び学習の中核に関連しており、既存の教育実践の追加的なものと考えられるべきではない(5(d))
- GAPで使用されるESDという言葉は、その活動自体がESDという言葉を使用しているかどうか、若しくはその歴史及び文化的背景や環境教育、持続可能性の教育、グローバル教育、発展教育等の特定の優先的な分野に関わらず、上記の原則に沿った全ての活動を含む(5(g))

【実施】

- 加盟国の政府、市民社会の団体、民間セクター、メディア、学術及び研究のコミュニティ、学習の促進・支援を行う教育や他の関係機関、個々の教員及び学習者は、政府間機関と同様に責任を負う(13)
- 必要に応じて指標の開発が求められる(18)
- GAPは、5年後にレビューされ、必要に応じて優先行動分野の変更もあり得る(19)

国内における今後の動向

ESDユネスコ世界会議は終わりましたが、ESDの取組はここからが新たなスタートです。環境分野においては、ESDユネスコ

世界会議を契機として、環境省ではESDを推進、発展させていくための事業を計画しており、愛知県では「人づくり」の取

組を進めています。また、名古屋市でも持続可能な都市「環境首都なごや」を目指した取組を進めていきます。

環境省（「国連ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会 参照）

①「国連ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会 報告書取りまとめ

「国連ESDの10年」後の取組に関する懇談会を開催し、今後のESDの取組方針として、以下の通り取りまとめられました。

4つの課題	8つの取組
① ESD人材 ESD教員や支援する研修やコーディネーター等が不十分	● ESD研修の充実や、講師となる人材の確保 ● ESDプロデューサー・コーディネーター育成
② 教材・プログラム 教材等が体系化されておらず、教材を素早く見つけることが困難	● ポータルサイトなどの再整備 ● 教材・プログラムアドバイザー（仮称）の配置
③ 連携・ネットワーク ESDを行う組織間の連携・ネットワークが不十分	● 様々な主体が参加する全国的なネットワークづくり ● 国際機関との連携
④ 全体の推進体制 目標設定やフォローアップ等が不十分。ESDの認知度が低い	● ESDの目標設定、進捗管理・評価の実施 ● 経済、文化、開発などにESDの観点を取り込む

②「国連ESDの10年」後の環境省における重点取組事項

- ① 連携・支援体制の整備 ———— ● 全国的なネットワーク機能の体制整備等
- ② 人材の育成・研修の充実 ———— ● 研修の実施 ● 地域特性に応じたESDを実践できる人材の育成
- ③ 教材の作成 ———— ● モデル的なESD環境教育プログラムの作成と実証 ● 既存の教材等も活用できる仕組みの構築

愛知県（平成26年版環境白書（愛知県） P24、25を参照）

持続可能な未来のあいちの担い手育成「人づくり」の推進に向けた主な取組

- 環境負荷を減らす身近な行動を「あいちエコアクション」とし、様々な場面での実践を促す県民運動の展開
- ポータルサイト「エコリンクあいち」の開設（エコアクションの意識づけや、環境学習施設、活動情報等の情報提供など）
- AEL（あえる）ネット（環境学習施設のネットワーク）の充実・強化
- ESDの普及促進

名古屋市（平成26年版名古屋市環境白書 P7を抜粋・要約）

持続可能な都市「環境首都なごや」を目指して

名古屋市では、1999年の藤前干潟の埋立計画の中止と「ごみ非常事態宣言」による大幅なごみ減量の取組を通して培われた「市民協働パワー」は、CO2削減に向けたエコライフの実践、2005年の愛・地球博の開催、2010年の生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の開催、2014年のESDユネスコ世界会議の開催へとつながっていきました。この市民協働パワーを、一人ひとりが環境問題を自らの問題としてとらえ、「知って、理解して、行動する」というESDの実践につなげていきます。そのため今後、以下のような取組を実施します。

- 様々な主体が参加する市民参加型事業の実施
- 次代を担う若者を対象とした環境保全に取り組む人材の育成
- 一人ひとりが環境問題に関心を持ち、行動につながるような仕組みづくりの検討
- 人づくり・人の環づくりのための、環境教育等促進法に基づく「環境学習等の推進に関する行動計画」の策定 等

これらの取り組みについては、これまで「なごや環境大学」が築いてきた多様なネットワーク・講座のノウハウなどとも連携させることによって、より効果的な事業展開を図ってまいります。

ESD実践編

導入

ESDを行うには

これまでの理解編では、主にESDの概念などを中心に説明を行ってきました。では、具体的にESDを行うにはどうしたらよいのでしょうか。ESDでポイントとなるのは、行動できる人をいか

に増やすかということにあります。このためには、参加型の手法を取り入れることが重要だと言われています。また、ESDとは、まったく新しいものではなく、これまでの取組に工夫や改善を加えて

いくものとされています。ESDの手法の切り口は様々ありますが、本書では以下の2つの観点から説明を進めていきます。

学び方・教え方について ⇨ ESDでは参加型の手法が大切にされている

- 参加体験型の学習方法や合意形成の手法を活用することが効果的
(ESD実施計画(P9参照)より)
- 学習者が持続可能な開発の行動へと駆られるような、革新的な参加型教育及び学習の方法を必要とする
(グローバルアクションプログラム(P23参照)より)

既存の取組とESD ⇨ 既存の取組を改善することがESD推進につながる

- ESDはそれ自体が新しい教育ではなく、従来の教育を深化させるもの
- ESDは更なる工夫の視点を与えるもので、ESDを通じて教育内容の工夫を継続していくことが重要
(以上、「国連ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会報告書(環境省)より)

実践編について

● P26～43「ESDの手法」、「具体的な行動」の作成者

特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター 伊沢令子さん、川合眞二さん
国際理解、人権、環境、まちづくりなどをテーマに参加型の研修、参加と協働のプロセスデザイン、教材づくりなどを行っている。自治体・自治体関係団体、NPO、教育委員会などにおいて実践者向けの講座やワークショップを数多く実施している。
ホームページ <http://nied.love-hug.net> Eメール nied@love-hug.net

● P44～50「既存の取組を改善して、取組の輪を広げる」の聞き取り先

なごや環境大学の講座企画者さん(主に2014年度後期講座企画者)に事前アンケートを実施し、本書の原稿作成に協力可能とご回答をいただいた団体に対して聞き取りを行った内容をまとめています。(聞き取り先はP44参照)



未来を築くユース100人会議でのファシリテーションの様子

CHECK

● 「国連ESDの10年」後の環境教育推進方策懇談会報告書

国連ESDの10年後の環境教育推進方策について取りまとめられた報告書で、国連ESDの10年のこれまでの主な取組、ESD推進に向けた課題、今後の環境教育・学習の推進方策などを具体的に記述しています。
<http://edu.env.go.jp/conference.html>



「知る」「気づく」「行動する」 — ESDの3ステップ —

風が吹けば桶屋が儲かる、A国がくしゃみをすればB国が風邪をひくような、相互につながりのあるグローバル化した世界にあっては、一国の課題はもはや一国だけのものではありません。環境、人権、平和などはどれも人類共通の課題であり、ある国で問題が起きれば、めぐりめぐって私たちにまで影響が及んだり、その問題の原因は、実は私たちにあるかもしれないのです。

ESDが目指しているのは、私たちの暮らし方のどこが地球環境にとって過剰な負荷となっているのか、何が生き難い社会を創り出す原因となっているのか、一人ひとりが知り考え気づき、自らの意識と行動を変えていくということです。

持続可能な社会を実現するためには、以下のESDの3ステップが大切にされています。

● ESDの3ステップ

- ① 知る………社会のことを知る
- ② 気づく………社会で起きていることは、他人事ではなく自分にも関わりのあることだと気づく
- ③ 行動する…課題解決とより良い未来を共に築くためのスキルを身につけ、行動する

大切にされている学び方 — ESDと「参加型学習」 —

一人ひとりの意識と行動を変えて行くためには、知識を得るだけでは十分ではなく、行動へとつながる気づきのある学びが必要です。

参加型学習は学習者主体の学び方で、参加と対話を基盤とした学びを通して、持続可能な未来づくりに役立つ価値観を育て、行動変容を支える方法です。一方向の情報伝達（講義）ではなく、学習者どうしの関わりあいがあります。「みんなが先生、みんなが生徒」と例えることができ、誰か一人から教わり個人の知識を増やすのではなく「学びの分有（分かち合い共有する）」を進めます。

「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）は、以下のようにESDの学びの方法をまとめています。

● 知識伝達型の教育とESDの学び方の違い（ESD-J）

知識伝達型の教育の方法		ESD的な学びの方法
● 講義形式（知の移転） ● 画一的 ● 過去（学問的所産）を学ぶ	教育の方法	● 体験／対話／協働形式（知の獲得と創造） ● 多樣的 ● 過去から学び、現在を学び、未来を創る
● 「教える－学ぶ」という上下関係	学習者と指導者の関係	● 協働的な探求者の関係
● 知識、教養を身につける（個人の変化）	予想される学習効果	● 能力と価値観を身につけ、行動につながる動機づけを得る ● 地域や社会も変化する（個人、地域、社会の変化）

● ESDが大切にしている「学びの方法」(ESD-J) ※()内はNIEDによる追記

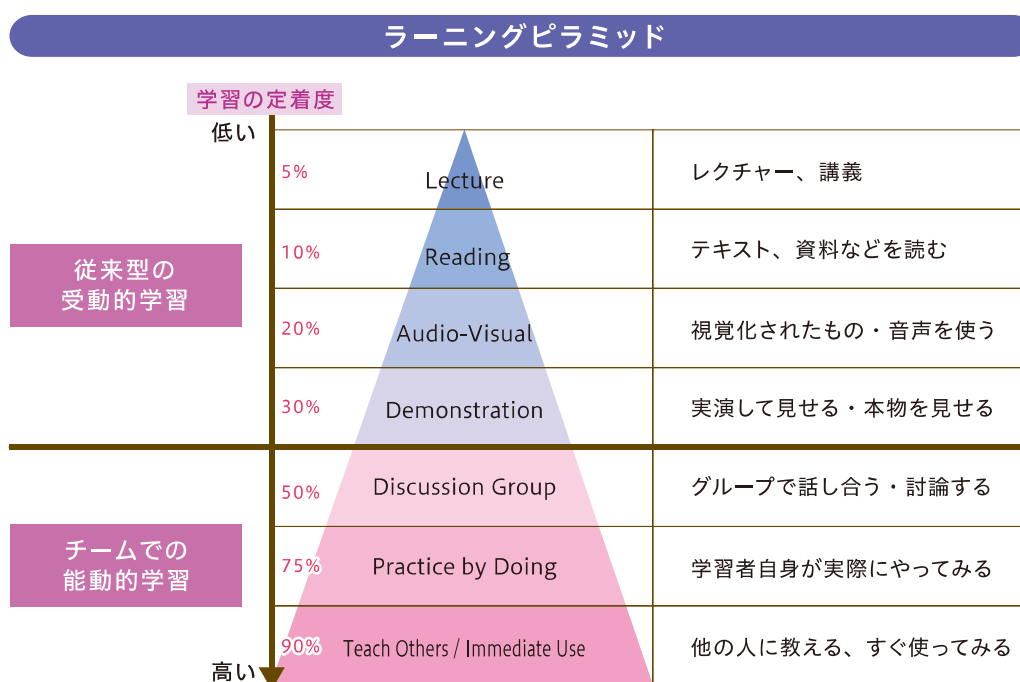
- 参加体験型の手法が活かされている(ワークショップデザイン)
- 現実的課題に実践的に取り組んでいる(テーマ及びプログラムデザイン)
- 継続的な学びのプロセスがある(プロセスデザイン)
- 多様な立場・世代の人びとと学べる(対象及びファシリテーション)
- 学習者の主体性を尊重する(ファシリテーション)
- 人や地域の可能性を最大限に活かしている(リソース活用)
- 関わる人が互いに学び合える(ファシリテーション)
- ただ一つの正解をあらかじめ用意しない(ファシリテーション)

このようにESDが大切にしている学びの方法は、大半が「参加型とファシリテーション」に関わることです。では、なぜ参加して学ぶことが大切なのでしょう。

「聞いたことは忘れる。見たことは覚える。やったことはわかる。」という中国の言い伝えがあります。聞いた話より実際に見たものの方がより印象に残り、見るだけではなく体験したことには発見があり、理解を助けるということです。

学習の定着度を表したラーニングピラミッド

ラーニングピラミッドとは、学習の方法と学習の定着度の関係を示した図です。学習の中で、学習者どうしに関わりあったり、学習者自らが行う活動が増えるほど、学習定着度が高くなるという図になっています。この図に関しての確かな実証実験があったわけではありません。しかし、先ほどの中国の言い伝え同様、このラーニングピラミッドの考え方が世界中に広まっている事実を見ると、教育に関わるたくさんの人が、「能動的な学習を増やすことで、学習の定着度が上がる」と各自の体験から感じているということではないでしょうか。



参考：アメリカ国立訓練研究所 (National Training Laboratories)

無関心の悪循環を断ち、他人事を自分事につなぐ

「関心がないから参加しない。参加しないから情報を得られない。情報が得られないから無関心のまま…」という無関心の悪循環を断ち、社会への関心を育てることと、「自分には関係ない」と感じがちな地域や世界の問題を自分事として捉えるために、参加型の学びは有効です。

参加型の学びは、自分とは異なる人や国、社会への関心・共感を引き出し、また自分自身をふりかえる機会を通して、無関心の悪循環を断ち、気づきを行動につなぐ学習サイクルです。

参加して学ぶことの良さは第一に「楽しく学べる」ということです。人は「楽しい」と感じる信頼に満ちた自由な雰囲気の中で、最も多く気づき、学ぶといわれています。体験しながら楽しく学ぶことで、「学ぶことは楽しい」と思えるようになります。

世界や地域で起きていることを知り、地球的視点に立って物事を考えたり、今ある情報を批判的に読み解いたり、多角的に国と国、人と人のつながりを考えることは、自分や世界の新たな発見に役立ちます。

【無関心の悪循環】

関心の欠如 ⇨ 参加の欠如 ⇨ 情報の欠如 ⇨ 関心の欠如 ⇨ ∞



気付く ⇨ 関心を持つ ⇨ 知る・わかる ⇨ 行動する ⇨ また気付く ⇨ ∞

価値観を育て行動変容を支える

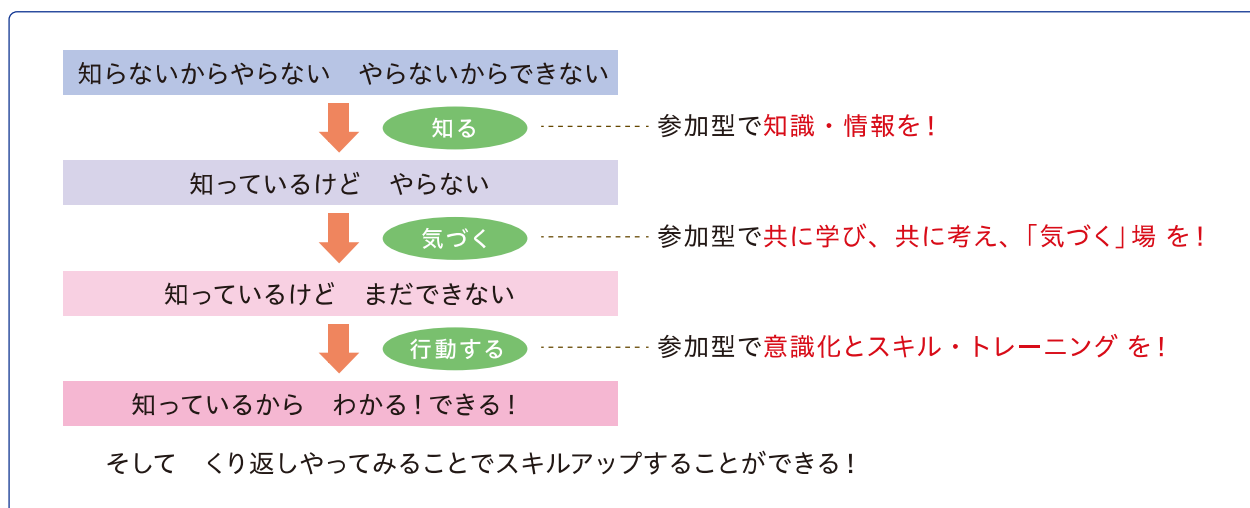
「自分にできることは何もない」、「自分一人が行動しても変わらない」、「誰かがやってくれる」という意識のままでは、社会の課題を解決することはできません。「わたしも社会の一員であり、当事者である」、「一人ひとりの選択と行動が社会に影響を与えている」、「わたしにも社会をより良く変える力がある」という意識を持ち、行動をより良く変えることが必要です。

個人の行動の素となっているのは個人の価値観です。その人が何を大切にしているか、どのようなものを志向しているか、それまでに学んできたこと、身につけてきたものが行動となって現れます。

例えば、食べ物を選ぶ基準として、早くて安く手軽なものが良いと考えれば、ファストフードやコンビニを利用するでしょうし、環境的にも健康的にも安全安心なものが良いと考えれば、自然と選ぶ食品も調理方法も変わるでしょう。価値観が変われば行動も変わるのです。

参加型学習では、問われることで自分の価値観をふりかえることができます。伝え合うことで多様な価値観があることを知り、異なるものと出会うことで発見や気づきがあります。対等で肯定的な場の保証があるからこそ、自分に自信を持てたり、考えを見直したり変えたりすることができ、自分をふりかえり他者から学ぶことを通して、より良く生きるための価値観を育てあうことができます。

● 「知識・情報」「気づき」「意識化」「スキル・トレーニング」を提供して行動変容を支える参加型



共に生きる力、関わる力を育てる

参加型の学び方は、課題を解決しながら「共に生きる力」を育むために、考える、伝える、聞く、お互いから学び合う、みんなで考える、話し合う、共有する、協力して創り出すなどの機会を提供します。

「共に生きる力」とは、「わたし(自己)に関わる力」、「あなた(他者)に関わる力」、「みんな(社会)に関わる力」(下図参照)のこと。参加型は、一人ひとりが安心していられる、対等で肯定的で受容的な場であることが前提となります。じっくりと自分に向かいあう体験、考えや気持ちをふりかえる体験、否定されず批判されずありのままを受容され認められる体験、他の人の学びに貢献する体験、お互いを尊重しあう体験などを通して、人は自己肯定感を高めることができます。

考え・伝え・聴く体験を積み重ねることは、コミュニケーションの練習になり、一つのテーマについて話し合い、グループで協力しながらより良いものを創り出す体験を通して、参加協力、合意形成、対立解決の力を育てることができます。それら一つひとつがまさに「共に生きる力」であり、参加型で学ぶことそのことが、力の習得につながっているのです。

「わたしを育てる」、「わたしとあなたの関係性を育てる」、「わたしとあなたの生きる社会を育てる」ために、参加型は有効です。

● 参加型で身に付く力(「共に生きる力」「関わる力」)



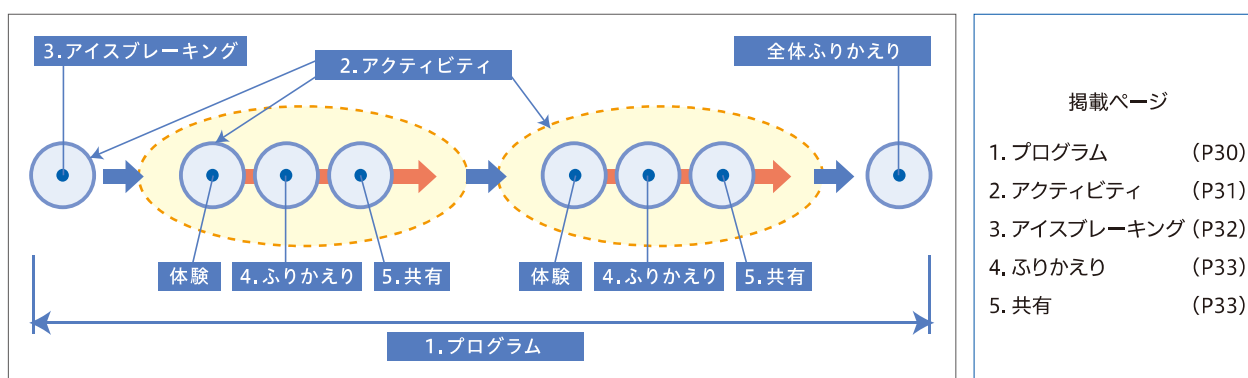
参加型の学びを作ろう！

参加型学習とは、対等な立場で集まった参加者（学習者）が、共通のテーマについて考えを深め合い、共同で何かを創り出す

作業と場のことです。参加者（学習者）自らの知識や体験を持ち寄り積極的に関わるスタイルで、一人ひとりが自分なりの意見と答え

を持ち、それぞれの意見を尊重しながらも共通のものを創り上げるための学び合いのことです。ワークショップともいいます。

● 参加型学習・研修（ワークショップ）の構成例



参加型学習・研修（ワークショップ）は、流れのある学びのパッケージのことで、これをプログラムといいます。導入となるアイスブレイキング（雰囲気づくり）、いくつかのアクティビティ（体験を通して発見や気づきを促す活動）の組み合わせと、最後の全体ふりかえりによって構成されるのが基本型です。

1. プログラム（流れのある学び）

ねらいの達成を目的として、いくつかのアクティビティを組み合わせたものです。

プログラムで大切なのは、起承転結、または導入→展開→まとめなどの「流れ」で、ねらいの達成や概念の共有が容易になるよう、アクティビティの組み合わせにストーリー性を持たせることです。つながりがわからないようなアクティビティの羅列や、参加者の気づき・発見が共有化されなかったり、やりっぱなしになってしまうことのないよう、配慮が必要です。プログラムの流れは、次の段階をたどることで、学びを深め、気づきを行動へとつなぐことを助けます。これを経験学習の4段階といいます。

- ① 体験する（アクティビティを体験する、参加型で考える）
- ② ふりかえる（体験して感じたこと・気づいたことを共有する）
- ③ 一般化する（共有からわかること・言えることを考える）
- ④ 応用する（日常に活かせることを考える）

よいプログラムは ◆ ねらいがはっきりしている ◆ ねらいにあったアクティビティである
◆ 参加者（学習者）の意識の流れに沿うストーリー展開がある
◆ 参加者（学習者）に合っている ◆ 柔軟性がある

など

2. アクティビティ(発見や気づきを促す活動)

プログラムを構成する個々の活動のことで、テーマに合わせ、参加者(学習者)から今までの経験や知識、意見を引き出すための工夫がある活動や、はじめから事実や答えを教えるのではなく、学習者が自ら考え、気づく工夫のある参加型活動のことです。

参加者(学習者)を目的に応じて、ペア、3～4人、5～6人などのグループに分け、グループ毎に協力して取り組みます。それぞれのグループが体験を通して発見したこと、わかったことなどを、活動の後に全体で共有することで、1つのグループでは見つからなかったことも、他のグループの発見から学ぶことで、気づきを増やす事ができます。

アクティビティは「目的」、「内容」、「手法」の組み合わせによりできています。

アクティビティ＝ 学習者が「○○について知り・考え・気づくために」(＝目的)

「△△といった事柄や情報を」(＝内容)

「□□の方法(枠組み)を提供し、それに当てはめて考える」(＝手法)

参加型手法を使う目的と意義

アクティビティは、物事の構造的な把握、共有したい概念の伝達、参加意欲・態度・技術の育成などの目標に照らし、自分をふりかえるもの、集中するためのもの、分析するためのもの、協力してネクストステップを創り出すためのものなど目的は多様です。一方でアクティビティの中で活用される参加型の手法も「ブレインストーミング」「カード式整理法」「ランキング」など(主な手法の解説をP36～38に掲載)多様な手法があります。以下のとおり、目的や対象にあった有効な手法を選ぶことは、参加を促進し発見を促すために大切です。

目 的	有効な参加型手法
● 全体像を捉える、空間的に捉える (全体像を把握する)	ブレインストーミング、イメージ図、 カード式整理法、地図づくり(マッピング)
● 因果関係を考える (問題の影響、原因を探る)	派生図、因果関係図
● 分類、対比させて考える (共通点や傾向を見つけだす)	カード式整理法、対比表、二次元軸法
● 立場を変えて考える (俯瞰したり、異なる視点から観る)	ロールプレイ、シミュレーション
● 優先順位をつける、行動計画を立てる (目標を達成する行動につなぐ)	ランキング、できることビンゴ、力の分析

室内アクティビティ例 環境問題、どんな問題？どうして問題？

目的：環境問題とは、それを解決しなければ自分にも影響が及ぶ生物の生存に関わる問題であることと同時に、問題を作り出している原因には、実は自分も関わっていることに気づき、課題解決のために自分のできることを考える。

- 内容：① 環境問題（「地球温暖化」など具体的なテーマを設定すると良い）を解決しないとどうなる？派生図で考える。
- ② 環境問題（①と同じ具体的なテーマで）を作り出している原因は何？因果関係図で考える。
- ③ ①と②の関係図それぞれに書き出された具体的な「影響」と「原因」の中で、「自分にも関わる、関わりがある」と思うところに各自イニシャルを書き入れる。
- ④ ①～③の活動を通してわかったこと、気づいたことをグループでまとめ、全体で発表する。
- ⑤ 環境問題（①と同じテーマ）を解決するために、自分にできることを7つ具体的に考える。

手法：関係図（派生図／因果関係図）、環境問題を解決するための7カ条作り

屋外アクティビティ例 ネイチャー・ビンゴ

目的：五感を研ぎ澄ませ自然に親しみ味わうことを通して、自然界の多様性を知り、センスオブワンダーを育てる。

内容：① 森、雑木林、里山、小川などをフィールドに、その環境に合わせて作られた9マスのビンゴカードに示されたものを探してくる。

〈ビンゴカードのテーマ例〉

赤いもの／黄色いもの／青いもの／ふわふわしたもの／サラサラしたもの／落ち葉／不思議な形をした樹／良い匂いのするもの／もらったカラーチャートと同じ色をした自然界にあるもの など

- ② 見つけたもの、発見したものを発表しあって、結果を共有する。
（他の人（チーム）が言ったことと同じものがあったら○をつけ、列でそろったら1ビンゴ）
- ③ 感じたこと、気づいたことなど感想を共有する。
※自分たちがが自然の中で見つけたもの・発見したことを元に、クイズを1つ作り、出題しあうと、よりゲーム性が増し、興味・関心につながる。
- ④ 自分たちが暮らしている環境をふりかえり、今日の体験を通した気づきを元に、今後その環境がどうなると良いのか、大切にしたいことや自分たちにできることを考え、共有する。

手法：ビンゴ／クイズづくり

3.アイスブレイキング（導入時の雰囲気作り）

初対面の人どうしが集まっている場合、あるいは知っている人どうしても、日頃あまりコミュニケーションがないような場合など、慣れない場と方法で緊張している参加者（学習者）の状況を想定し、その緊張を氷（アイス）になぞらえ、氷をみんなで砕いていく（ブレイキング）＝緊張をほぐしていく活動をアイスブレイキングといます。対話のきっかけを作り、緊張感を解きほぐし、安心感のある発言しやすい雰囲気を作ることを目的として行います。プログラムの節目に導入し、気分を変えるために活用することもできます。

共通のテーマで自己紹介をする、声を出す、体を動かす、五感を使うなど、アタマとカラダとココロを動かしながらゲーム感覚で簡単にやってみることができ、楽しさのある活動が主なものとなります。

● アイスブレイキングを選択する時のポイント

- | | | |
|-------------|------------|------------------------|
| ◆ 楽しさのあるもの | ◆ 簡単にできるもの | ◆ 体を動かす |
| ◆ 声を出す | ◆ 知り合える | ◆ 自分をふりかえり他の人への関心につながる |
| ◆ 本題への布石となる | | など |

アイスブレイキング例1 名刺で自己紹介

- 内容：① ファシリテーター（P34）は自己紹介のために答えてほしい3～4つの共通のお題を伝える。
- ② 参加者には1枚紙を配付し、そこにお題の答えを書き込む。
- ③ 全員の準備ができれば、参加者は会場を歩き回り、1人相手を見つけ、紙に書いたことを基にお互いの自己紹介をする。
- ④ 15分くらいの間にできるだけ多くの人とペアを交代し自己紹介しあう。
- ※お題例：わたしのウリ（長所・持ち味）／今関心のあること／わたしが大切にしていること／今日の期待（参加した理由） など

アイスブレイキング例2 仲間さがし

- 内容：① ファシリテーターは参加者に問いかけたいお題を出す。
- ② 参加者はそのお題に対する自分の答えを一つ用意し、その答えを声に出しながら会場を歩き回り、同じ答えの仲間を見つけ、グループを作る。
- ③ 参加者全員がいくつかのグループに分かれたら、ファシリテーターはそれぞれがどんな答えの仲間かを聞いて回る。
- ④ いくつかお題を変え、仲間さがしを繰り返す。
- ※お題例：好きな色／住んでいる地域／誕生日／好きな季節／苦手な教科 など

4.ふりかえり（他者へ伝えるために意識化）

アクティビティを体験した後は必ずふりかえりを行います。体験をしてみて、各自が感じたこと、考えたこと、発見したことを再確認する作業のことを「ふりかえり」といいます。参加型学習・研修（ワークショップ）の中ではこの「ふりかえり」をとても大切なものと考えています。

体験ただけで終わりではなく、体験したことをふりかえることによって、参加者（学習者）の持っている価値観や感情、今までの経験、知識が掘り起こされます。体験をふりかえて初めて、他者に伝えることのできる「気づき」として意識化することができます。

5.共有（次への共通基盤をつくる）

自分自身の考えや感情、体験してふりかえたことを、他の参加者に伝えたり、聴いたりする作業を共有といいます。ペアで共有する場合もあれば、グループで共有してグループの意見としてまとめる場合もあります。それを全体場で発表し、参加者全員で共有することにつなげていきます。

共有することで1人ひとりの考えが深まり、新たな気づきが生まれ、1人の気づきがその場に集まった全員の気づきとして共有されることで、次に向かう共通基盤を作ることができます。

ファシリテーターは「問いかける」「引き出す」

参加型学習・研修(ワークショップ)を進行する人をファシリテーター(facilitator)と呼びます。単に研修や会議の進行役にとどまらず、以下のような役割を担う人です。

● ファシリテーターとは

- 参加型学習・研修(ワークショップ)を進行し、対話を活性化させる人。
- 話し合いの交通整理をする議長役だけではなく、話し合いの素材になるものを用意し、時間管理をしながら全体の進行をする人。
- 参加者より多くの知識を持っている人、または答えを持っている人ではない。明確なねらいを持ってプロセスを後押しする人。(アイデアを出し、新しいものを作り出すのは参加者です)

● ファシリテーターの役割

- 目的を明確にし、共に考え、学びあうためのプログラムや流れを用意します。
- 参加と対話を引き出し促進するために、対等性と安心感のある場を確保します。
- 参加者の感想、意見の相違点や共通点、グループで合意されたことなどの共有を進めます。
- 視覚的なアウトプットを残します。(参加者の意見の板書、参加者がまとめた模造紙など)
- すでに与えられている結果を伝えるのではなく、新たな発見を期待します。

ワークショップの人数と会場配置

人数は、ファシリテーターがフォローでき、参加者(学習者)どうし学び合えるという観点から言えば、25～35人くらいが適当です。ただ、3人ぐらいのsmallサイズにはsmallサイズのアットホームなよさがあります。また逆に工夫次第では50人以上を対象とすることもできます。

会場配置は、ファシリテーターも含めて参加者(学習者)全員が対等な立場になるように椅子だけで「車座」になる配置、最初から机と椅子で「島状」のグループに座る配置、全員が前を向いた「講義」形式から始める配置など様々です。動きのあるアイスブレイキングから始める場合は車座配置から、グループワークから始める場合は島状配置から始めるとよいでしょう。

また、教室で最初から講義形式に机を並べて進めたい場合や固定式の机と椅子の会場の場合などは、前後左右の4人を1つのグループとすることも有効です。こうすると、机を並べ替えてグループを作る時間がかからず、グループ替えも列毎に人が移動して行うことができます。50人を超える人数でワークショップをする場合は、複数のファシリテーターで手分けすることや、共有や発表方法の工夫が必要となります。

いずれにせよ、学びに集中したり楽しんだりするためには、会場配置にとどまらず、照明、空調などの設備や学びのための道具(模造紙、マジック、付せん紙など)などの環境づくりは大切であり、ファシリテーターは準備の段階から、このような環境づくりに心を砕くことも大切な役割の一つといえます。

考える、話し合う、協力する… グループ活動の進め方

参加型学習・研修（ワークショップ）の中で、全体を4～5人のグループに分け、グループ内で協力して行う活動（グループ活動）を進めるコツは、「考える」時間を十分にとること、考えたことを共有するための方法を工夫することです。具体的には次のような配慮が必要となります。

● グループ活動のポイント

- いきなりグループで話し合うといっても、なかなか難しいものです。まずは一人ひとりが自分の考えを整理したり、それを他のメンバーに伝えたりするために、一人ひとりで考える「時間を保証」することが重要です。
- 誰も話さないで譲り合っているうちに時間が過ぎてしまうことを避けるためには、次のような工夫も必要です。
 - ◆ グループの一人ひとりに何らかの役割（司会係、記録係、発表係、話し合いの盛り上げ係など）を担ってもらうことは、グループ活動に慣れていない場合に有効です。最終的には役割がなくても、積極的にグループで話し合うことに慣れ、自分たちで合意形成を進められるようになることを目指します。
 - ◆ 口頭で話し合うだけよりも、文字にしたり、絵にしたり、図にしたり、表にしたり視覚的に共有できる方法を使うことでイメージを膨らませることができます。話を発展させたり戻したりする中で、理解の共通基盤を作ります。また、成果物があれば、ふりかえりの時、話し合いのプロセスを思い出すことができます。

TPOに合わせたグループづくりのポイント

グループの人数は、場に合った形態をそのつど選択することがポイントになります。

人数は、4～5人が最適人数と考えますが、参加者（学習者）の関係性、会場や机の状況などで、臨機応変に変えることができます。ただし、一般的なグループワークの場合は、グループの人数が7人以上になると、作業に時間がかかり時間内にまとまらなかったり、全員が話せない場合も出てきたりします。可能な限りグループの人数は最大6人までにとどめ、「自分の参加がグループへの貢献になる」という意識を持てるようにすることが大切です。

また、グループのメンバーは、グループ替えをして適宜入れ替わることで、多様な人や意見に出会う機会となり、特定のグループの関係性に問題がある場合の対処にもなります。

グループの入れ替えのタイミングは、まとまりのあるアクティビティで区切ると良いでしょう。

	2～3人のグループでの話し合い	5～6人のグループでの話し合い
メリット	● 安心感があり、うまくいけばじっくりと深い話し合いができる ● 1人が話す時間を多く確保することができる	● たくさんの多様なアイデアに触れることができる ● 一人ひとりの責任を負担に感じなくてもすむ
デメリット	● 慣れないと「ペア」は緊張する ● 活発な話し合いに発展しないまま、他の話にそれるか、逆に沈黙してしまう	● 自分が話さなくても誰かがやってくれるという他力本願な気持ちが顔を出す ● 本論に集中しないで、他事をしやすくなる

人数・グループ数に合わせた発表・共有の方法

発表・共有には、次のような方法があります。グループ数やかけられる時間に応じて、適宜選択します。

● 発表方法の一例

- グループごとに時間を決め（3分～5分）、全てのグループがプレゼンテーションする方法
- 全部ではなく、その内のいくつかのグループに発表してもらう方法
- ギャラリー方式で各グループの成果物（模造紙のまとめ）を各自、自由に見てまわる方法。その際、漠然と見て回るのではなく、自分たちの模造紙にはないアイデアを他のグループの模造紙の中から見つけ覚えて帰る、見つけてきたものをグループで共有することが肝要
- 成果物（模造紙のまとめ）のまわし読み。人は移動しないで、模造紙だけをまわす方法 など

参加型手法の解説

以下に、主な参加型手法について解説しました。

参加型 手法

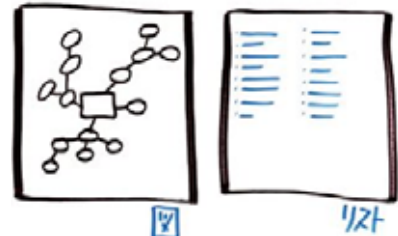
全体像を捉える

物事を構造的に捉える前に、その時目の前にあるものに集中し大筋で全体像をつかむ。

ブレイン ストーミング

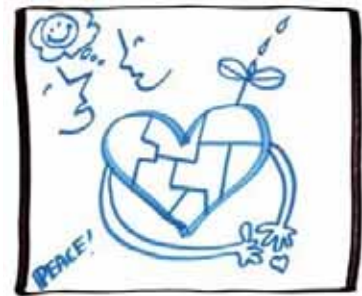
あるテーマや概念について、それぞれがイメージするもの、思い浮かべるものをどんどんリストアップしていく。模造紙の真ん中にタイトルを書き、各自がマジックを持ち、寄せ書き風に四方八方から、自分のアイデアを伝えながら書き留めていく方法と、リストとして羅列する方法がある。そのルールは次の通り。

- | | |
|-----------|------------|
| ①質より量 | ④斬新なアイデア歓迎 |
| ②否定ではなく質問 | ⑤みんなは応援団 |
| ③結合と発展 | |



イメージ 図

あるテーマに関して理解していること、イメージできることを絵で表現する。個人個人で行う場合は、それを共有することで人の理解の多様性に触れることができたり、共通点、相違点を見つける手助けになる。グループで作業する場合は、それぞれのイメージを持ち寄り、絵にまとめるために話し合いをしなくてはならない。その中で、何がそのテーマに関する共通認識かを確認することができ、概念を大筋で理解する助けとなる。



参加型 手法

空間的に捉える

それぞれが物事をどう空間的に捉えているのか、またはそれを共有することで新たに確認できることは何かをさぐるために、地図として表現してみる。

地図 づくり マッピング

テーマに即して、そこに何があったかを思い出し地図に表す。実際に歩いて確認して地図を作る場合もある。



参加型
手法

因果関係を考える

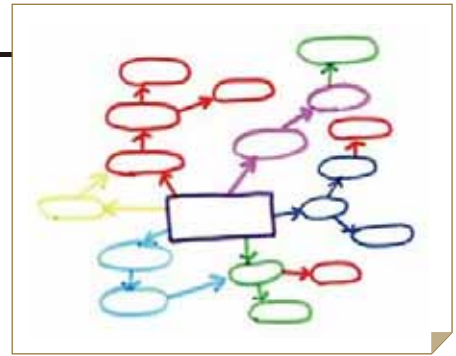
見通しを持つことが主体的な行動の助けとなるよう、物事の因果関係や帰結を考える。

派生図

ある事柄に関して、そのことが他へ及ぼす影響を、多様な角度から考えて書き出す。1つ書き出したら、更にそこからつながる次の影響を考え書き足し派生させる。

因果関係図

ある事柄に関して、その事象の原因と考えられることを、多様な角度から考えて書き出す。1つ書き出したら、更にそれを作りだしている原因を探り、原因の原因を可能な限り辿る。



参加型
手法

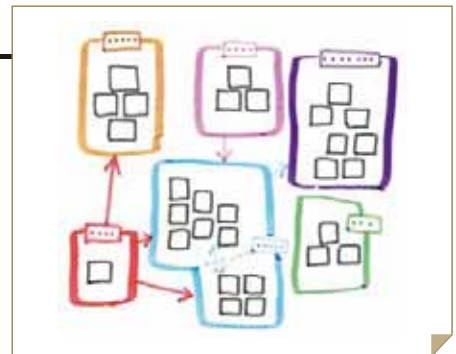
分類して考える

多様な意見を整理類型化し、共通の基盤に立ち共通のものを作り出すスタートにする。

カード整理法

あるテーマに対して、カード（付せん紙）に個人の考えを1枚1項目ずつ書き、次のようにグループで分類整理する。

- ① 1番手がカードの1枚を読み上げ、模造紙の好きな場所に貼る。1番手と同じ又は近い内容を書いた人は、隣に自分のカードを貼る。
- ② 2番手が違う内容のカードを読み上げ、1番手とは違う場所に貼る。2番手と同じ又は近い内容を書いた人は、隣に自分のカードを貼る。
- ③ この要領で、同一内容、類似内容を分類整理していく。
- ④ 全員のカードが貼り終わったら、同じ内容の固まりをマジックで囲み、各まとまりに内容を表すキーワードをつける。



参加型
手法

対比して考える

ある事柄を2つまたはそれ以上の視点から比較対比して考え、物事の特徴を捉える。

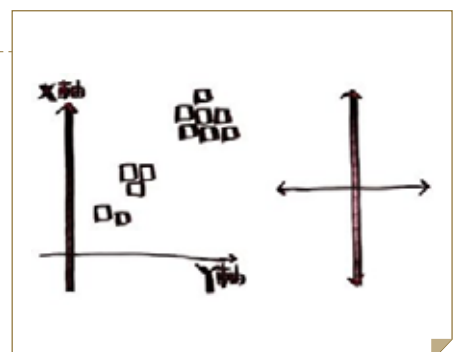
対比表

ある事柄を2つの面から捉える場合、模造紙を左右に分け、それぞれの特徴だと思われることをできるだけたくさんリストアップする。3つの面から捉える場合は、模造紙を3分割し、4つの面から捉える場合は、模造紙を4分割して使う。



二次元軸

- ① ある事柄に関する各自の考えをカード（付せん紙）に書き出す。
- ② X軸、Y軸と異なる指標を儲けた模造紙を作り、それぞれが書き出したカードは二次元軸表のどこに分類されるか考え、グループで協力して貼り分け、共有する。



立場を変えて考える

様々な立場の人の気持ちを理解する。異なる立場に立つことを通して新たな気づきを引き出す。また、疑似体験することで、問題を明らかにしたり、学習者がそれを実感するためのもの。

ロール
プレイ

問題を含む状況について、そこに関わる人々になりきり、会話や態度で表現する。シナリオ作りから参加者が行う場合もあるが、あらかじめ用意されたシナリオを演ずる場合もある。

シミュ
レーション

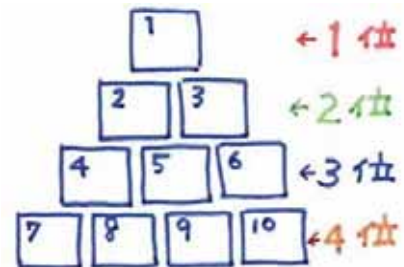
ある事象をモデル化し、単純化したゲームや状況設定などを疑似的に体験する。

優先順位を考える

多様な人同士で合意形成を進めるため、自分の価値観をふりかえり、他者の価値観を知り、話し合う態度を身につける。

ラン
キング

多様なアイデアを出し、自分の価値観に従いそれらに優先順位をつける。個々人の優先順位の背景を共有し、話し合い、グループとしての合意点を見いだす。単純に1位から順番に順位づけする方法と、図の様な同位の順位のあるピラミッドランキングやダイヤモンドランキングという方法もある。



行動計画を立てる

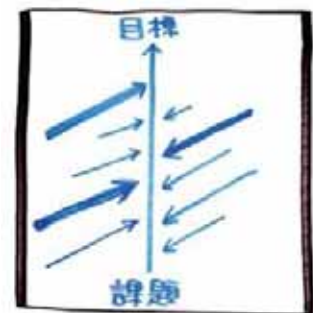
知ったこと、気づいたことを基にして、課題解決や目標達成に向けた具体的行動を考える。

できる
こと
ビンゴ

課題解決や目標達成に向けた具体的行動をできるだけたくさん書き出す。9マスビンゴ表を使う場合は、9つの具体的行動を考える。その場合、「自分のできること」「仲間とできること」「国のできること」という3つの視点から各3つを考える方法もある。

力
の
分
析

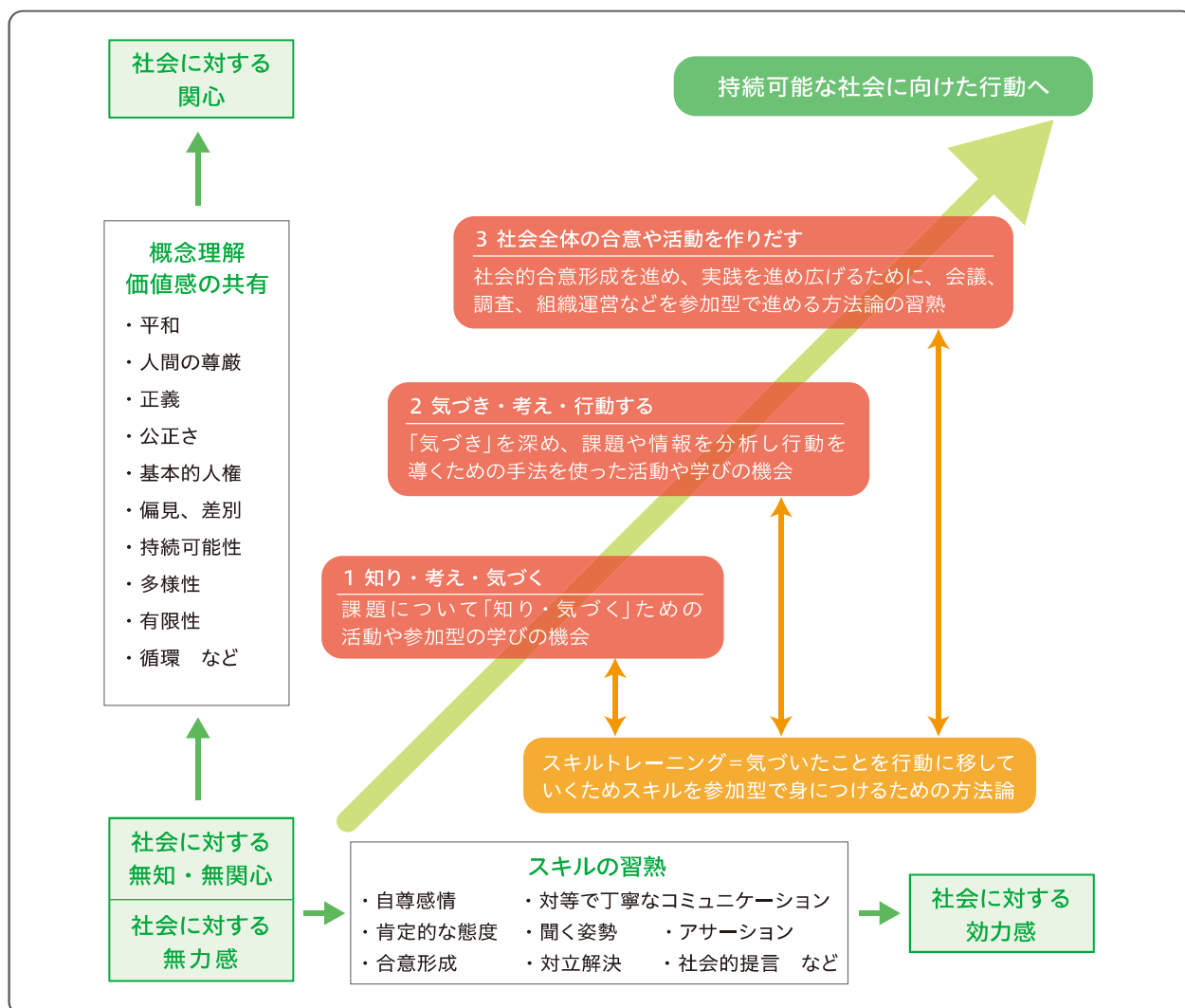
- ①模造紙の一番下の真ん中に「変えたい現状＝課題」を書く。
 - ②一番上には、「課題が解決された姿＝達成目標」を書く。
 - ③課題から目標まで一直線に上向きの矢印を書く。
 - ④矢印の左側には、課題解決に役立つ行動、有効に働く力などを箇条書きで書き込む。
 - ⑤矢印の右側には、課題解決や目標達成を阻む行動、じゃまする力などを箇条書きにする。
- ※ 影響力が強いほど太く長い矢印にして書く。



気づきから行動へ ―社会への関心、効力感、スキルを育てよう！―

持続可能な社会に向けて、人々が行動していくようになるためには、社会で起きていることへの無知・無関心、無力感から脱する必要があります。

● 持続可能な社会に向けた行動と「社会に対する関心・効力感・スキル」の関係



縦 軸	社会的関心と行動へのモチベーションを喚起するためには、社会で起きていることを知り、持続可能な社会に向けて共有すべき「概念」や「価値観」を、自分と社会と未来とのつながりの中で理解することが役立ちます。
横 軸	「自分には変える力などない」、「自分1人がやったってどうせ何も変わらない」といった「無力感」から脱し、「1人ひとりが課題解決に関わるのがより良い社会を作ること役に立つ!」、「自分も変える力を持っている!」、「やれる!できる!」といった「効力感」を持つためには、自己肯定感、コミュニケーション、参加協力といった力やスキルを育てることが役立ちます。
斜め軸	人の行動変容を支えるものは、知る→考える→気づく→行動する→知る→考える→気づく→∞という、スキル・トレーニングを兼ねた参加型の学びのサイクルです。

参加型の会議手法で新たな切り口を

持続可能な社会の実現に向けて、社会全体の合意を進め行動を広げていくためには、より多くの人々が共に学び合い、話し合う機会が必要です。立場や利害を越え、対等に丁寧に対話し互いの理解を深め、共通の未来に向けての合意点や新たなプロジェクトを創造していくためには、ワールドカフェやオープン・スペース・テクノロジー (OST) といった参加型の会議手法が役立ちます。

ワールドカフェ

アニータ・ブラウン氏とデイビッド・アイザックス氏によって開発・提唱された、参加型の話し合いの方法です。カフェにいる時のようなリラックスした気軽な雰囲気の中で、より多くの人と話し合いをするためのワークショップ手法で20～30人から100人規模での実施が可能です。

「どんなまちになると良いか？」など、参加者がテーマを自分ごととして考えるプロセスを提供できます。



[進行例]

- ① 参加者が4～6人に分かれてテーブルを囲み、1回20～30分でメンバーを3回ほど入れ替えながら、対話を重ねていきます。1人あたりの発言時間が多く取れることと、少人数で話し合うことで共感や刺激を得て、発言内容が回を重ねるごとに深まっていくというメリットがあります。
- ② 全体で設定されたテーマ(または「問い」)に関して、自由に話し合い、テーブルに置かれた模造紙に、話し合いのプロセスやキーワードなどを自由に書き残します。メンバー入替の時、1人はカフェマスターとしてグループに残り、次に来たメンバーにこれまで話し合った内容を紹介し、新たな話し合いに入ります。
- ③ 結論を出すことが目的ではなく、参加者の自由な発想と対話を通して、発見や話し合いの深まりがあり、相互理解・共通理解が進むことを目的とします。

オープン・スペース・テクノロジー (OST)

ハリソン・オーウェン氏によって提唱された参加型の会議手法です。ある課題について、参加者自らが課題解決やビジョン達成のためのプロジェクト(取組)を考え、提案し、仲間を募り、ミーティングを行う中で、自発性・主体性・実行性のあるプロジェクトを創出していくためのワークショップ手法です。熱意にあふれた対話生まれ、活動の継続が期待できます。



[進行例]

- ① 参加者全員が円になってOSTの目的を共有します。
- ② 取り組みたいプロジェクトのアイデアを持っている参加者が、それを紙に書き、前に出て全員に向けて発表。紙は壁面に張り出します。
- ③ 参加者は、自分が賛同し、共に取り組みたいプロジェクトを選択し、記名します。
- ④ プロジェクトごとにミーティングを開催し、設定時間まで話し合います。
※期待した内容と違うと感じた時、自分は貢献できないと感じた時は、別のプロジェクトのミーティングに移動できる。
- ⑤ OST終了後、各プロジェクトの進捗状況を報告し、次回ミーティング日程や連絡方法を決めて終了。

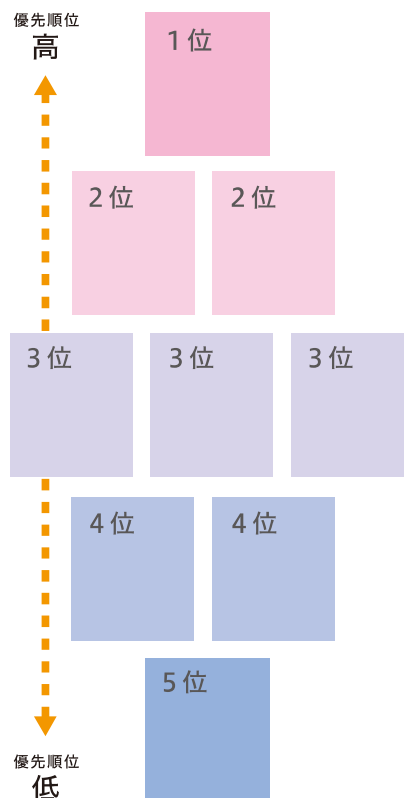
持続可能な未来を実現する9つの方法

具体的な行動のイメージを持つ

人類共通の課題を解決し、持続可能な未来を実現するために、私たちができることはたくさんあります。一人でできること、仲間とできること、直接行うこと、間接的に行うこと、様々なものがあります。以下の9つの方法について、あなたが考える優先順位を付けてみましょう。

● アクティビティ「持続可能な未来を実現する9つの方法」

- ① A～Hの「方法」を読んで理解する。
- ② A～H以外の自分のアイデアがある場合は、Iの枠の中に、書き込む。
- ③ A～Iの「9つの方法」のうち、優先順位の高いと思うものからダイヤモンド状にランキングする。
- ④ なぜその方法を優先すべきと思ったのか、理由も併せて、他の人と話し合ってみよう！
- ⑤ 次ページ以降のA～Hの「方法」の具体例を読んで、自分の優先順位で実践してみよう！



A

書籍やウェブなどで地球の抱える問題について調べ、現実を知る。



B

問題解決に取り組む団体の講座やイベントに参加し、人々とつながる。



C

寄付やボランティアなどで問題解決に取り組む団体を応援する。



D

世界や地域で、地球の抱える問題解決に向けた直接的な活動を行う。



E

便利さ・効率・利益などを追求する生活のあり方を根本的に見直す。



F

エコでフェアな商品を選択する。



G

行政や政治に関心を持つ。



H

家庭、地域、学校における共育を通して、行動できる人を増やす。



I

自分で考えてみよう

「持続可能な未来を実現する方法」の具体例

持続可能な未来を実現するA～Hの8つの方法について、具体的な方法やオススの情報を示しました。ぜひ実践してみてください！

A 書籍やウェブなどで地球の抱える問題について調べ、現実を知る

地球の抱える問題は、地球的規模から、国、地域、私たちの暮らしまで、相互に関係しており、何がどう問題なのか現実を知る

<オススの書籍>

- 『地球白書』、『地球ジュニア白書』（※毎年発刊）（ワールドウォッチ研究所）
- 『NHK地球データマップ 世界の“今”から“未来”を考える』（NHK出版）

<オススの調べる場所> ⇒ P51～58 「ESDの実践に役立つ施設、ウェブサイト」参照



B 問題解決に取り組む団体の講座やイベントに参加し、人々とつながる

問題解決に取り組む人の体験を聞いたり、関心のある人どうして話し合い、人とのつながりを作る

<講座やイベントの探し方>

- ウェブサイトにある「イベント情報」にパソコンでアクセスする
- 「メールマガジン（メルマガ）」に登録し、Eメールで情報を送ってもらう
- 広報誌を定期購読したり、公共施設でチラシを探したりする

<オススのウェブサイトなど> ⇒ P51～58 「ESDの実践に役立つ施設、ウェブサイト」参照



C 寄付やボランティアなどで、問題解決に取り組む団体を応援する

自分が直接活動できなくても、問題解決のために日々活動している団体に賛同し、できる範囲で応援する

<団体を応援する方法>

- 賛助会費を払ったり、募金や献品で寄付をしたりする（書き損じハガキ、クリック募金など）
- ボランティアに応募して、団体の活動を手伝う
- ブログ投稿や手紙などで賛同の気持ちを伝える



D 世界や地域で、地球の抱える問題解決に向けた直接的な活動を行う

地球上で問題の起きている場所に出向いて解決するための活動を行ったり、自分が住んでいる地域から取組を行う

<直接的な活動の方法>

- NGO／NPOの会員などになって団体の活動に携わる
- 自分が働いている会社や地域の中で、仲間とともにできることを探して実行する

<活動団体を探す方法> ⇒ P51～58 「ESDの実践に役立つ施設、ウェブサイト」参照



E 便利さ・効率・利益などを追求する生活のあり方を根本的に見直す

グローバル化の中で、地球環境問題や途上国等の貧困を解決するために、先進国に住む私たちの生活のあり方を根本的に見直す

<求めたい生活のあり方>

- ロハス（環境、健康、持続可能性に配慮したライフスタイル）
- 地産地消（食べ物やエネルギーなど地域で生産されたものをその地域で消費する）
- 農的生活（自然に優しく、生命を大切にし、生態系を守り、自然体で過ごす生き方）
- NPOバンク（地域のために活動を行うNPO、市民団体等に融資を行う非営利の銀行）などへの貯金



F エコでフェアな商品を選択する

地球環境や途上国の貧困に配慮した経済活動を促すため、エコでフェアな商品を選択する

- 環境に配慮した商品、フェアトレード商品などを選び、買うようにする
- 企業の環境や人権への配慮、社会貢献活動に興味を持つ



G 行政や政治に関心を持つ

地球が抱える問題は、世界や国レベルで制度や仕組みを作ったり、地方自治体レベルで取組を進める必要があり、そのために行政や政治に関心を持つ

- 政策立案時の市民参加やパブリックコメントに応募する
- 国や自治体等が行うイベントや呼びかけに参加する
- 選挙に関心を持ち、候補者の話を良く聞き、投票する



H 家庭、地域、学校における共育を通して、行動できる人を増やす

生活や社会のしくみを変えるために、共に学び合う「共育」を家庭、地域、学校で進め、地球のために行動できる人を増やす

<一人ひとりができる共育の方法>

- ウェブサイトやブログを立ち上げ伝える
- 家族や友人に口コミで伝えたり、家庭で子どもに教えたりする
- 学校や地域に出向いて講演したり、人に伝える指導者を育てたりする



ESD実践編

ESDのヒント

既存の取組を改善して、 取組の輪を広げる

環境保全や環境学習の活動は、持続可能な社会づくりに向けた取組であることから、全てESDにつながっているといえます。このため、既に実践している

取組を改善して、取組の輪を広げることは、様々な問題解決のために行動できる人を増やすためのESDを推進していくことにつながります。以下では、なご

や環境大学の講座企画者さんから聞き取りをした既存の取組を改善して、取組の輪を広げるためのヒントを場面別に紹介します。

ヒントをいただいた方々

なごや環境大学の講座企画者さん(主に2014年度後期講座企画者)に事前アンケートを実施し(2014年9月)、本書の作成に協力可能とご回答をいただいた団体の以下の方々からお話を伺いました(2015年1月)。

- | | |
|--|------------------------------------|
| ● エコプラットフォーム東海
浅田益章さん、高橋美枝子さん | ● 寺子屋プロジェクト
代表 井上淳之典さん |
| ● SNP(サステナブル・なごや・プロモーション)チーム
事務局 平石晶代さん、西野圭一郎さん | ● 一般社団法人 名古屋建設業協会
会長 山田厚志さん |
| ● おりがみプロジェクト
河野香織さん | ● 名古屋わかもの会議
代表 水野翔太さん |
| ● 劇団シンデレラ
座長 フローレスともこさん | ● 特定非営利活動法人 藤前干潟を守る会
理事長 亀井浩次さん |
| ● 特定非営利活動法人 泉京・垂井
理事兼事務局長 榎本淳さん、河合良太さん | ● 山崎川グリーンマップ
代表 大矢美紀さん |
| ● 特定非営利活動法人 中部リサイクル運動市民の会
副代表理事・事務局長 和喜田恵介さん | |

(50音順)

ESD全般

藤前干潟を守る会／亀井さん

- ESDは大上段に構えたと自分には関係ないと思って聞いてもらえない。とはいえ、皆がやっていることは全てESDだと低く構えたと何も変わらない。少しずつ変えていき、いかに継続的にできるかが理想。

劇団シンデレラ／フローレスともこさん

- ESDとは子どもたちの笑顔、地球上のどこかで泣いている人とか生きものをなくすこと。
- ESDで自分がされたら嫌なことはしない。逆に自分たちがやってくれたら嬉しいことをすること。

中部リサイクル運動市民の会／和喜田さん

- 行動できる「システムと場」を提供することがESDにつながっている。リユースやリサイクルのことを知っていても、それを実践する仕組みや場所がなければできない。

泉京・垂井／榎本さん、河合さん

- 我々は「豊豊(おんぼう)社会」を目指すと言っている。意味としては、基本は循環型で自分たちの地域でまかない、どうしても外部に頼らないといけない場合は、外部の人を搾取したりせず互いの利益になるような、公平な取引や相手の自立を目指すという考えで、これがESDだと考えている。

エコプラットフォーム東海／浅田さん

- この10年はESDに熱心になり家を空けることが多かった。ある時、「外でのESDも良いけど家のESDもやって」と奥さんに言われ、ハッと気がついた。大それたことでなくても身の回りでできることがある。家の草を取ると喜ばれるし、近所との会話も増えた。足元の身近なことに目を向けることが大切だと気づいた。

プレゼンテーション

SNP／平石さん、西野さん

- スライドは一般的に向けてわかりやすい内容、見やすいデザイン、短い文章にして改良し続ける。ゆっく、はっきりと対象の世代に合わせて話し方を変える。



グループワーク

SNP／平石さん、西野さん

- 全員が何か話せるようにする。
- ファシリテーターは基本的に中立（決定権がある訳ではない）。自分の意見は言わず、会議のプロセスの管理を行う。チームワークを引き出し、チームワークが最大限生かされるようにする。
- 合意形成や相互理解を得やすくするため、それぞれの発言を可視化し、発言の自由を工夫する。



エコプラットフォーム／高橋さん、浅田さん

- 進行役が話しすぎないように、方向性をあらかじめ決めすぎないようにしている。

寺子屋プロジェクト／井上さん

- ファシリテーションの基礎は聴くこと。一般的にインタビュー能力の高いほうが営業のノルマが良いといわれている。それほど聴くことは大切。
- ファシリテーションとは、そこにいる一人ひとりが気持ちよく自分の思っていることを表現できるか、そのための仕組みづくりや働きかけ。よく誤解されてしまっているがファシリテーター自身がその場をまとめてしまってはいけない。皆がまとまっていくための働きかけが仕事。
- 参加型の研修でグループワークをやって何となく形だけで終わってしまう場合は、そのグループワークの目的や意義が明確になっていなかったり、参加対象者が明確になっていないのが理由。そのため事後の評価もできない状態になっている。
- ファシリテーションはグラフィックを使うことが大切。視覚的に確認しながら話し合っていく。言葉だけだと空中戦になり押し問答になる。ホワイトボードなどで可視化すると方向性が見えてくる。
- ファシリテーションはその人のキャラクターや人生観が反映されてくるため、ファシリテーションを一律に語ることは難しい。要点はおさえつつ、その人流にアレンジをして行えば良い。

名古屋わかもの会議／水野さん

- 参加者は、自腹で交通費を払ってきてくれている。それで発言できないのは良くないので、全員が発言できるように工夫をしている。意見を言えないのは場の空気が悪いからだと思っている。

ブース展示



SNP／平石さん、西野さん

- 来場者が入りやすいと思うブースづくり（見た目にも、精神的にも）。人が座って待っているところとか、入ったらすぐに説明されそうな雰囲気のところは入りやすい。
- 視覚的にも精神的にも間口が広く、明るい雰囲気のところは入りやすい。
- 見せたいもの（コンセプト）が明確なところに入ろうという気になる。
- 展示パネルは、視覚的にわかりやすいキャッチコピー、イラスト、写真などを入れると良い。パネルの形を変えるとか、装飾するとか、何か変化をつけると読んでもらいやすい。
- 来場者の気を引く仕掛けとしては、ハンズオン（手に取って触れるなど）の仕掛け、体験型、時間がからない、景品がもらえるなどが有効。
- 興味のありそうな人にタイミングよく声をかける。展示物を持って、通る人に見せる。しつこくしない。
- 子どもが理解できるくらいのものが良い。専門的なことは他の団体に任せるくらいの割り切りも必要。

劇団シンデレラ／フローレスともこさん

- イベント出演の際にブースがあると、ほぼ全てのブースを見て回り、資料をもらって情報収集する。
- 若い人が声掛けをしているところに入ってみようという気になる。
- 賑わっているブースや生き物を触れたり、何かの体験ができるところにはつい行ってしまう。

おりがみプロジェクト／河野香織さん

- 見習うべきなのは、環境活動とは別の外の世界のサービス業など。
- やさしい言葉で伝える、目線を合わせる。なみなな感じ、馴れ合いな感じは避ける。
- 入りやすい雰囲気、華やかな感じにする、服装にも気を配る。
- 相手からいかに信用してもらえるかが大切。
- 押しつけがましいのは良くない。自分たちの活動を延々と話すのも良くない。



屋内体験

SNP／平石さん、西野さん

- 体験（工作など）の前後に、環境との関連などを説明する（体験中は夢中で頭に入らないので前後で）。あるいは、説明が書いてあるチラシなどを配布して後で読んでもらう。

屋外体験

藤前干潟を守る会／亀井さん

- 自然観察は生物オタクになってしまうことが多い。環境活動には生活系、自然系などのいくつかの方向性があるが、自然体験の場で生活系の話をするなど共有できると良い。

山崎川グリーンマップ／大矢さん

- 安全なことが大前提なので、事故などが起らないように安全面にはとにかく注意を払っている。

泉京・垂井／榎本さん、河合さん

- 講座を複数回に分けて、「座学→現地見学→座学」という流れで行ったが、通しで参加してくれた人には頭に入ったと好評だった。



子ども



劇団シンデレラ／フローレスともこさん

- 子どもが理解すると親にも伝わる。小学校3、4年生が理解できる内容にしている。
- 子どもはスタンプラリーが好きで全部集めたがる。集めたスタンプのカードは家に大切に持ち帰る。スタンプラリーのポイントは会場の角に置くと会場内をくまなく回ってもらえる。
- 子ども(特に女の子)は変身願望が強いので、フェイスペイントを行ったら盛況だった。お面や鉢巻など体に身に着けるものが好き。啓発グッズで缶バッジなどの身に付けられるものを配る場合は、ただ渡すのではなくてその場で着けてあげると、子どもが会場内を回った際に、他の子が見て「自分も欲しい」と言ってまた別の子が来る。

名古屋建設業協会／山田さん

- ブースでは、大人に声掛けをしても恥ずかしがったり、捕まったら嫌だと思って足早に通り過ぎてしまうことが多い。その点、子どもたちはそういうためらいが希薄で、純粋に面白そうと思ったら長く滞在してくれる。

中部リサイクル運動市民の会／和喜田さん

- リユース&リサイクルステーションに、資源を持ってきた子どもがボランティアに褒めてもらえると喜ぶ。家族以外の第三者に褒められる場所が子どもには必要。

寺子屋プロジェクト／井上さん

- 子どもは多様な大人と関わり、気づくチャンスが必要。

山崎川グリーンマップ／大矢さん

- 在来種を守るために川から取り除いた外来種は、結果的には殺処分となる。その状況を招いた人が責任を取るのだという重い事実を、子どもたちには伝えている。

藤前干潟を守る会／亀井さん

- 大人の行動がダメだと、それを見る子どももそれで良いと甘んじてしまう。



ユース

名古屋わかもの会議／水野さん

- 自分たちの活動は、若者が発信したから若者が反応してくれたと思う。大人が若者に言っても聞かなかったかもしれない。自分たちと同じ年代だから話を聞いてくれたと思う。
- 声をかけた人たちは社会のことに関心がなさそうだったが、話をすると、それぞれに意見をもっていた。

中部リサイクル運動市民の会／和喜田さん

- ボランティアはESDになると思う。学生にも来てほしい。学校に出向いて説明するより現場に来てボランティアをしてほしい。そのほうが絶対にためになる。

広報

エコプラットフォーム／高橋さん、浅田さん

- 自分たちの行事に出てほしいと口コミで声をかける。誰かの紹介というと来てくれやすい。
- その時のテーマにあった地域のネットワークに参加してくれないか声をかける。
- 声をかけることを恥じない。待っていて来いというのはおかしい。
- 動員も悪いことではない。動員されて初めて聞く話もある。



名古屋わかもの会議／水野さん

- 若者は駅などに置いてあるチラシとかはもらわないが、フェイスブックやツイッターは見る。フェイスブックは2日に1回は更新して、動きがあることを見せている。結構これが大切だったりする。

劇団シンデレラ／フローレスともこさん

- 地域に根差した新聞社やケーブルテレビは話題を欲しがっていることも多い。



人とのつながり

名古屋建設業協会／山田さん

- お願いごとをしに行く時は、相手のメリットだけを意識するようにしている。この人と付き合うとどういうメリットがあるかと想像してもらえるようにして、行く時は相手にとって有用だと思われる様々な情報を持っていく。
- 何とかして欲しいといって行かない。相手にこうしたら良いのではとか、こんな協力ができるとかアドバイスするつもりで行く。とことん相手のためになるというスタンスで行けば、繋がりが生まれたあとに相手からメリットがもたらされる。

中部リサイクル運動市民の会／和喜田さん

- 困った時は早めに相談に行くことが大切。行くと「早めに言ってくれたらよかったのに」と言われる。
- 今までの延長でリサイクル活動を続けていた時は、あまり新しく人と話すことがなかった。「リサイクル」から一歩進んで「リユース」中心の社会を創ろうと思った時に、色々な人に相談してより多くの人と関わるようになった。
- 自分たちがやりたいことを明確にすることで、参加する人が確実に増えてきた。
- 自分たちがやれる範囲のことをやっていると他の人も関わりようがない。今までにない、自分たちではできない規模のことを大きな画用紙に描いて、その周りに余白があると、色々な人がアドバイスしてくれたり、手助けしてくれたりする。

藤前干潟を守る会／亀井さん

- 空振りの活動も沢山あったが、当たったものは今につながっている。何でもやる姿勢が必要。

劇団シンデレラ／フローレスともこさん

- 公演の後には、その土地の子どもたちと交流会をしている。子どもの交流が広がり、次につながっている。

団体運営

SNP／平石さん、西野さん

- お金だけではなく、例えば学びや関係性、楽しみなどの別のメリットがないと続かない。
- 一過性のイベントでなく組織として継続するためには、各自の役割や発言の場を提供することが大事。
- 活躍の場を提供するのが大人の役割。場と運営資金は何かするから、後は自由に動いてもらうというスタンスが良いと思う。また学校ではなく会社でもない組織で、世代や立場が違う人で運営する時に、できるだけ若い人に任せることが大事。そして、大人も楽しいからこそサポートし続けられると思う。
- 参加できる時、参加したい時だけでも良いというゆるいルール。企業にとっての本業、学生にとっての学業をおろそかにしない範囲で行う。まずは参加者が無理をしないことが大切だと思う。
- 大人も学生も互いに学びあい、学生が次世代の子どもたちに教える。その取組そのものがESDだと思う。



劇団シンデレラ／フローレスともこさん

- 休んだ人にも電話やメールでフォローしている。お母さんへのフォローも怠らない。「今回は〇〇ちゃんこういう所が良かったですよ」などを伝える。年上のお姉さん団員には、年下の団員をほめさせている。「今回の一等賞」というものを毎回やっていて、例えば、一人で片づけをしていたら皆の前で褒めている。

おりがみプロジェクト／河野香織さん

- ボランティアさんと一緒に仕事をするときは自分がやりすぎないようにしている。むしろ自分がこういうことができないとアピールすると、ボランティアさんが一生懸命補ってくれる。

その他

エコプラットフォーム東海／高橋さん、浅田さん

- 時代のバトンタッチ。COP10やESDユネスコ世界会議が開催された時にその場にいた人はいいが、そうでない人は感覚がわからないので、意図的に伝えていかないといけない。

山崎川グリーンマップ／大矢さん

- お年寄りには、昔のことや自分のこれまでの経験を話したいという人がいっぱいいる。
- 地元の良いところはずっとそこにいると見えないことがある。外から来たからこそわかることもある。

名古屋建設業協会／山田さん

- 自分たちの取組を継続させるためには、企業の場合は本業となんらかの結びつきを見出すことが有効だと思う。私はそれを「そろばんづくのCSR」と呼んでいる。商売抜きだと、単発的な社長の道楽で終わってしまう。

多くの団体から出た意見

- ESDとは、結局は人のつながりではないかと思っている。

ESD実践編 まとめ

ESDの進め方は活動内容や地域の特性などに応じて様々に存在します。そのため、手法についても、今回紹介した2つの切り口に限定されるものではありません。

しかしながら、どのような手法であっても、ESDでは、行動できる人を増やすための工夫と、既存の取組を、地域や社会をより良く変えていくことにつなげる工夫が必要とされていることに変わりはありません。

今回、本章の作成にあたっては、「ESDとは、結局は人のつながりではないか」という意見を数多くの方々からいただきました。本書の様々なページで触れられているとおり、「つながり」は、ESDの大変重要なキーワードであり、ESDを行う際には、常に意識しておく必要があります。

未来をつくる学びをはじめよう

地域から学ぶ・つなぐ 39のヒント(環境省)

地域でESDを実践するためのESDの視点や方法の取り入れかた、ネットワークのつくりかたなど、39のヒントと具体的な事例が紹介されています。
(以下のウェブサイトからダウンロード可能)

https://edu.env.go.jp/desd/39key_ideas_ja-1.pdf



「未来をつくる学び」をはじめめる39のヒント

学びのプログラムをデザインする

- 1 「興味・関心」のあることを入口に
- 2 ほんもの体験・まるごと体験
- 3 地域にある人・コト・ものを掘り起こす
- 4 いろんな立場の人と学びあう
- 5 異なる年齢のグループが一緒に活動する
- 6 「わたし達の未来」を描く
- 7 「楽しい」が元気と継続のキーワード
- 8 学びと活動を積み重ねる

学びあう関係づくり

- 9 まちのパン屋さんや農家が先生に
- 10 社会教育施設が大学生の活躍の場に
- 11 地域ボランティアがまちづくり講座の講師に
- 12 ITや映画づくりでESDをサポートする
- 13 大学生がアシスタント・ティーチャーに
- 14 地域のリソースと学校の先生の
出会いの場をつくる
- 15 コミュニティ活動の
コーディネーターを育てる
- 16 都市と農村をつなぐ
コーディネーターを育てる

新たな仲間を増やす

- 17 ESDを旗印にする
- 18 ふりかえればESD
- 19 直接会って話す
- 20 地域の悩みを一緒に解決する
- 21 学校には「力になれますよ」という
スタンスで

相乗効果を生み出す

- 22 小さな種をみんなで育てていく
- 23 能力と資源を活かしあう
- 24 みんながメリットを感じる企画
- 25 学校の先生と一緒につくる
- 26 「ふりかえり」を大切に

知恵と力を共有する仕組みをつくる

- 27 いくつかの情報共有の方法を使い分ける
- 28 無理をさせない・無理をしない
- 29 自発性と連携を生み出しやすい体制を
- 30 専任のコーディネーターを置く
- 31 人や活動をつなぐリソースセンター
- 32 地域のサポーターを組織化する
- 33 学びあいの場をつくる
- 34 インターネットを活用する

体制を維持するための基盤をつくる

- 35 行政の施策に組み込む
- 36 大学や企業の「地域貢献・社会貢献」と
つなげる
- 37 協定を結ぶ
- 38 補助金、助成金を活用する
- 39 収益活動に発展させる

自分たちで講座や体験学習、環境保全活動などを実施する際には、様々な団体が提供している情報やサービスを活用することが有効です。これらを活用することは、活動の手助けとなるだけでなく、新たな気づきやつながりを得ることにもつながります。

施設

● 環境

名古屋市環境学習センター（エコパルなごや）【名古屋市】

バーチャルスタジオやワークショップなどの参加型学習ができるコーナーや環境情報が盛りだくさんの展示など、身近な環境から地球環境まで幅広い視野で環境について楽しみながら、体験し、考え、学ぶ、環境学習の拠点。

住所：名古屋市中区栄 1-23-3 伏見ライフプラザ 13 階

TEL：052-223-1066



調べものの時の活用例

・図書ライブラリー

環境に関する約3,000冊の図書が閲覧可能で貸出も行っており、パソコンを使って本やビデオを探すこともできる。また、映像による専門家のショートレクチャー（講義）を受けることができる。



・ビデオライブラリー

約300本の環境に関するビデオやDVDを取り出して、自由に観ることができる。また、環境省のDVD教材も観ることができる。



・情報誌エコパルなごや

環境に関する特集記事や講座・イベント情報などを掲載。年4回発行。図書ライブラリーで閲覧できるほか、下記ウェブサイトでもダウンロード可能。

・名古屋を中心に活動する多様な主体のチラシやパンフレットが入手可能。

・「なごや環境大学」実行委員会の事務局を併設

持続可能な地球社会を支える「人づくり」「人の輪づくり」をめざす、「なごや環境大学」の事務局を設置。（詳細は次ページ）



◆ウェブサイト

エコパルなごやのウェブサイトは、名古屋市の環境教育・学習を発信するポータルサイトで、子ども向けのプログラムや教材などがダウンロード可能。

<http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/ecopal/>

閲覧・ダウンロードできるものの例

- ・名古屋市環境学習プログラムガイド（※）
- ・なごやエコキッズ事例集
- ・なごやエコキッズ向け教材
- ・野外体験型環境学習プログラム

※環境サポーターや環境局職員などが市内の園や学校へ出向いて実施する講座や、東山動植物園や農業センターで行う講座を紹介



1. 環境学習プログラムガイド
2. なごやエコキッズ事例集
3. なごやエコキッズ向け教材
4. 野外体験型環境学習プログラム
5. 環境サポーターや環境局職員などが市内の園や学校へ出向いて実施する講座や、東山動植物園や農業センターで行う講座を紹介

なごや環境大学【名古屋市】

2005年に開催された「愛・地球博」と同年に開学し、これまで1,200以上の講座やイベントに延べ16万人以上が参加し、2015年3月で開学10周年を迎えた。ウェブサイトでは「まちじゅうをキャンパス」に展開する様々な講座・ゼミナール等の情報が検索可能。

住所：名古屋市中区栄1-23-13 伏見ライフプラザ13Fエコパルなごや内

TEL：052-223-1223

<http://www.n-kd.jp/> Mail：jimu@n-kd.jp



概要

目的

「環境首都なごや」そして、「持続可能な地球社会」を支える「人づくり・人の輪づくり」を進め、行動する市民、協働する市民として「共に育つ（共育）」

方針

- 立場や分野を越えて「知識・経験・もどかしさ」を持ち寄る
- 「自分の言葉」で考える（脱・理屈や建前の上滑り）
- 「本音の議論」で接点を見つけ合う（脱・手前味噌）
- 地球市民として大きな展望を共有し合う
- 「本音の協働」で大きな流れをつくる

運営

- 立場や分野を越えたネットワークで支え合う
- 人々の志（人的・物的・経済的支援）によって支え合う

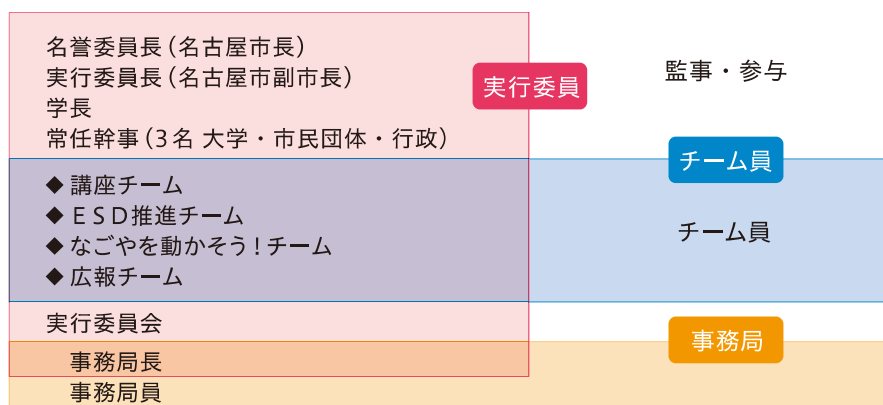
特徴

- ① 「まちじゅうをキャンパス」に、環境、防災、国際理解など多様な分野で講座を実施
- ② 知識、経験、問題意識を持ち寄り「共に育ち合う場」
- ③ 世代を問わず、環境や持続可能な社会づくりに関心を持つすべての人が「参加」
- ④ 市民団体・事業者・教育機関・行政が「協働」で運営



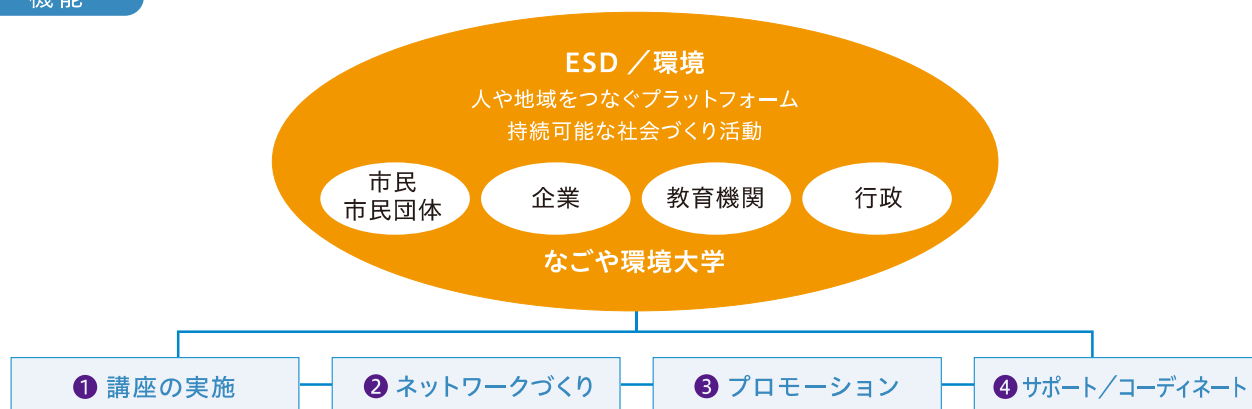
実行体制

市民・市民団体・事業者・教育機関・行政が立場や分野を越えて協働で運営しています。ネットワークを活かし、いろいろな知識、経験、問題意識を持ち寄り、問題解決への行動につなげています。



なごや
環境大学は
ESDそのもの！





① 講座の実施

里山や水辺も、教室や工場も「まちじゅうをキャンパス」に、「共に育つ」講座を展開。座学、フィールドワーク、討論、ワークショップ、調査・研究など、学びのスタイルも様々です。

あなたも先生になってみませんか？

環境問題やESDについての講座の企画運営者／団体を募集しています。採用となった企画は、「なごや環境大学ガイドブック」(市内区役所や図書館等で配布)や、なごや環境大学ウェブサイトで、広く紹介されます。



② ネットワークづくり

参画し、共に育つ、人づくり・人の輪づくりに向けてウェブサイトなどを活用したコミュニケーションをはかっています。また講座の企画運営者が集って、情報交換やワークショップを行う交流会を開催しています。

③ プロモーション

多くの市民や多様な立場の人々を巻き込んだイベントや公開講座により、人と人をつなぎ、環境首都なごやを目指すムーブメントを創りだしていく取組を行っています。

なごや環境ハンドブック

地球規模の問題から身近ななごやの環境問題までを学ぶことが出来るテキストを発行しています。(定価1,000円)

販売店：ジュンク堂書店 名古屋店、三省堂書店 ジェイアール名古屋高島屋店、名古屋大学生協、名古屋市立大学生協、日本福祉大学生協、なごや環境大学実行委員会事務局



④ サポート/コーディネート

地域、企業、教育機関等のESD活動のサポート、関連団体の橋渡しを行っています。

なごや環境大学が相談に乗ります

相談内容に応じて、多様なメニューや講師等の紹介、オリジナルメニューの作成やコーディネート、また当日の運営支援等を行います。

地域団体／NPO、企業、
教育機関、行政等

講座、CSR活動、プロジェクト等
各主体の活動に関する相談

講師等の紹介、当日の運営支援等
相談内容に合わせた企画案の提案

なごや環境大学



なごや生物多様性センター【名古屋市】

なごやの生きものに関する情報を収集し、発信するとともに、なごやの身近な自然の調査・保全活動を推進している。また、市民活動団体などの生きものの調査・保全活動を支援している（常設展示なし）。ウェブサイトでは、生物情報、イベントや講座、広報資料などを掲載している。

住所：名古屋市天白区元八事5-230

TEL：052-831-8104

<http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/biodiversity/>



名古屋市東山動植物園【名古屋市】

東山動植物園では、学校や子ども会など向けに生きた動物や植物を素材として、その出会いから始める様々な環境教育プログラムを用意している。動物や植物を観察しながら職員やガイドボランティアから説明を受けるプログラムなどのほかに、園内の動物会館や植物会館では動物や植物に関する質問や相談をすることができる。また、ウェブサイトには自ら園内を周りながら学べるよう、セルフガイドシートなどを掲載している。

住所：名古屋市千種区東山元町3-70

TEL：052-782-2111

<http://www.higashiyama.city.nagoya.jp/>



あいち環境学習プラザ【愛知県】

簡単な実験などを交えた環境学習講座や環境学習に関する相談受付、情報提供、DVD、機材の貸出などを行っている。環境学習コーディネート事業として、環境学習の内容や実施方法、講師、教材などの相談に応じるとともに、必要に応じて関係者の調整を行っている。

住所：名古屋市中区三の丸3-2-1 愛知県東大手庁舎1階

TEL：052-972-9011



◆ウェブサイト

「あいち環境学習情報ライブラリー」では、県内の環境を学べる施設やフィールド、環境に関するイベント、環境活動指導者、NPO団体、プログラム、教材等を探せる。環境学習施設やフィールド、環境活動指導者、NPO情報の登録も可能。

<http://kankyo-gakushu-plaza.pref.aichi.jp/>

中部環境パートナーシップオフィス（EPO 中部）【環境省】

「持続可能な地域社会」を実現するために、中部の地域課題の解決・改善に取り組む市民、NPO/NGO、企業、行政などを「つなぐ（パートナーシップ促進）」支援をしている。人と人、人と組織、人と場をつなぐ情報提供、コンサルティング、マッチングなどを行う。環境省発行のパンフレットや中部地区の環境分野に関する情報などが入手可能。

住所：名古屋市中区錦2-4-3 錦パークビル4階

TEL：052-218-8605

<http://www.epo-chubu.jp/>



● 市民活動・ボランティア

名古屋市市民活動推進センター【名古屋市】

市民活動を促進するための総合的な支援拠点。市民活動、ボランティア、NPOなどに関する様々な情報が入手可能。情報コーナーでは図書の閲覧が可能で貸出も行っている。作業スペースではチラシ作成のための印刷機や裁断機などが使用可能。貸会議室あり。

住所：名古屋市中区栄 3-18-1 ナディアパーク デザインセンタービル 6 階
TEL：052-228-8039



◆ウェブサイト

「なごや★ぼらんぽナビ」では、市民活動を行う団体の情報検索や登録が可能で、助成金や補助金情報も調べることができる。

<http://www.n-vnpo.city.nagoya.jp/>

● 国際理解、多文化共生、貧困など

名古屋国際センター【名古屋市】

名古屋地域における国際交流の総合拠点施設。3階ライブラリーでは国際理解・協力、世界の国や地域を紹介する図書、DVDなどが閲覧・視聴可能で貸出も行っている。また、NIC地球市民教室として、名古屋地域在住の外国人を学校や非営利団体などに講師として紹介するなどの事業を行っている。貸会議室あり。

住所：名古屋市中村区那古野 1-47-1 名古屋国際センタービル内
TEL：052-581-0100
<http://www.nic-nagoya.or.jp/japanese/nicnews/>



あいち国際プラザ（愛知県国際交流協会）【愛知県】

愛知県の国際交流拠点となる施設。1階の多文化共生センターの相談・情報カウンターでは外国人向けの各種情報・資料が入手でき、2階の図書コーナーでは国際交流関係の和・洋書約 20,000 冊の閲覧や貸出を行い、海外の新聞・雑誌を閲覧することもできる。また、地域における国際理解教育の普及とその担い手を育成するため、同協会が作成した国際理解教育教材「わたしたちの地球と未来」を活用した講座などを開催している。

住所：名古屋市中区三の丸 2-6-1 愛知県三の丸庁舎内
TEL：052-961-8744
<http://www2.aia.pref.aichi.jp/>



なごや地球ひろば【JICA中部】

世界の課題や開発途上国について学べる体験型施設。情報コーナーでは、JICAの出版物や中部地域の国際協力に関する情報が入手できる。また、国際協力の経験を有するガイドが施設案内する「なごや地球ひろば訪問プログラム」や 開発教育・国際理解教育を授業で実践できるような指導者を育成する開発教育指導者研修を行っている。

住所：名古屋市中村区平池町 4-60-7
TEL：052-533-0220
<http://www.jica.go.jp/nagoya-hiroba/>



● まちづくり

名古屋都市センター【名古屋市】

名古屋のまちづくりに寄与する拠点。まちづくり広場では、まちの歴史と今を紹介。まちづくりライブラリーでは、約72,000冊の図書が閲覧可能で貸出も行っている。また、積極的にまちづくり活動に取り組む担い手を育て、地域における住民主体の活動の輪を広げていくための講座やワークショップなどを実施している。貸会議室あり。

住所：名古屋市中区金山町1-1-1 金山南ビル11・12階

TEL：052-678-2212

<http://www.nui.or.jp/>



● 人権

なごや人権啓発センター ソレイユプラザなごや【名古屋市】

人権問題について、気づき・学び・行動するための多様な機会を提供するとともに、人権研修や人権学習の際に利用できる施設。体験コーナーでは高齢者、妊婦、車椅子などの疑似体験が可能。また、人権に関する図書、DVDなどの閲覧・視聴・貸出も行っている。人権学習などに利用可能な研修室・多目的室あり。

住所：名古屋市中区栄1-23-13 伏見ライフプラザ12階

TEL：052-684-7017

<http://www.jinken.city.nagoya.jp/>



● 男女平等参画・女性教育

名古屋市男女平等参画推進センター・女性会館（イーブルなごや）【名古屋市】

男女平等参画と女性教育について、相談と学習の両面から総合的にサポートする施設。情報フロア活動コーナーでは、市関係施設のイベント・事業等の情報を入手可能。図書資料室では女性の生き方、男女参画、ジェンダーに関する図書などが閲覧可能で貸出も行っている。貸会議室あり。

住所：名古屋市中区大井町7-25

TEL：052-331-5288

<http://e-able-nagoya.jp/>



● 防災

名古屋市港防災センター【名古屋市】

災害について見て、学んで、体験することで、いざというときに備え、何をすべきかを知ることができる施設。防災に関する図書、ビデオなどの閲覧・視聴が可能で貸出も行っている。貸会議室あり。

住所：名古屋市港区港明1-12-20

TEL：052-651-1100

<http://www.minato-bousai.jp/>



生涯学習Webナビなごや【名古屋市】

名古屋市の生涯学習情報の総合サイト。教育サポーターネットワークのページでは、生涯学習ボランティアなどの募集を行っており、自然科学、遊び・体験などの区分から登録可能。また、リンク先の「e-ねっと+なごや」(名古屋市作成)では、動画でなごやの自然環境などの現代的課題や歴史、文化、自然などの「なごや学」を学ぶことができる。

<http://www.suisin.city.nagoya.jp/>



エコリンクあいち【愛知県】

日常生活の中で行う地球にやさしい身近な環境配慮行動(エコアクション)を気軽に実践できるポータルサイト。県内各地の環境イベントの検索が可能。自分たちのイベント告知やレポートを掲載することができる。あいちエコアクション広報部の「OS☆U」がサイトの使い方を分かりやすく解説。

<http://aichi-eco.com/>



ユネスコスクール公式ウェブサイト 教材ルーム

【文部科学省(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU))】

ユネスコスクールに関する情報サイトで、教材ルームではESDに関する様々な教材を書籍、ビデオ・DVDなどの分類やテーマごとに検索可能。

<http://www.unesco-school.jp/materials.edu/>



+ESDプロジェクト【環境省】

ESDの取組の促進や充実に向けた活動の輪を広げるプロジェクト。全国のESDの取組が検索できる他、助成金、研修、教材などの様々な団体が提供する支援メニューなどが検索できる。自分たちの情報を登録することも可能。

<http://www.p-esd.go.jp/>



ESD環境教育プログラム【環境省】

ESDを実践するためのモデルプログラムや各地域の自然環境や歴史・文化などの特性を活かした地域版プログラムの検索、ダウンロードが可能。また、ESDのインタビュー記事や最新情報などの閲覧もできる。

<http://www.geoc.jp/esd/>



ECO 学習ライブラリー【環境省】

環境教育実践のための情報サイト。様々な団体の資料や教材が検索でき、分野や地域等による検索も可能。国、自治体、企業などが行う環境学習などの情報を掲載することができる。

<http://www.eeel.go.jp/>



我が国の環境政策に関するポータルサイト

日本の環境政策【環境省】

関係府省、地方公共団体、公的研究機関などが作成する環境関係のウェブサイトを探しやすくし、情報源の入口となるポータルサイト。

<http://www.env.go.jp/doc/portal/>



特定非営利活動法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)

「国連ESDの10年」を追い風として、市民のイニシアティブでESDを推進するネットワーク団体のウェブサイト。ESDの各種情報が入手可能 (P9で一部紹介)。また、「未来へつなぐ」のページでは、ESDコーディネーターのスキルなどについて動画で学ぶことができる。

<http://www.esd-j.org/>



「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム

同フォーラムの集大成としてまとめられた、日本の優れたESD実践事例集がダウンロード可能。防災、気候変動、生物多様性、持続可能な生産と消費、歴史文化遺産、貧困撲滅と社会的公正などの観点から国内の優良事例を紹介している。

<http://www.desd.jp/>



名商ecoクラブ【名古屋商工会議所】

名古屋商工会議所が会員企業の環境活動をサポートする会員制クラブのウェブサイト。この地域の多様な企業が取り組んでいる環境教育事例集「企業が取り組む環境教育」(詳細はP13)のダウンロードが可能。

<http://www.meisho-ecoclub.jp/>



環境パートナーシップ・CLUB (EPOC)

産官学連携のもと中部地区を拠点として持続可能な社会の構築に向けて活動するEPOCのウェブサイト。会員企業がそれぞれの特性を活かして、学校・公共児童施設などを対象に出前講座や見学講座を行っている。

<http://www.epoc.gr.jp/>



取組紹介 ～私たちのESD～

エコプラットフォーム東海

浅田益章さん、高橋美枝子さん

EPT(エコプラットフォーム東海) = ESDの縮図



「とことんトーク」では、防災や原発、エネルギーなど様々な問題を多角的に掘り下げる

「EPT」という場で つながりを広げる

エコプラットフォーム東海(以下EPT)は「持続可能性」を中心概念とした環境教育の発展を共通目標として、人材の育成やプログラム開発、情報収集・提供を行い、東海地域の環境教育活動の新しい展開に重点を置いています。

2002年から活動を開始して、トヨタ自動車からいただいた助成金で25人の環境学習ナビゲーターを育成。現在は、EPT呼びかけ人の元代表、育成されたナビ

ゲーター7人と、数年前に新たに参加した現代表の合計9人で構成されています。

メンバーは、様々な考えをもち、意見が異なる場面もありますが、「持続可能性」という共通の目的で活動するホームグラウンドであり、市民にとっては「持続可能性」をテーマとしたESDプログラムを実施する組織です。

「とことんとーく」は 問題解決力を高める場

私たちがこれまで開催してきた「とことんとーく」という市民講座は、多様な意見に接することで自分を深め、問題解決を図ることを目指し行ってきました。

テーマは環境問題だけに特化せず、防災や原発、エネルギー問題を、環境や社会、経済など多面的に取り上げて議論をしました。「講座の中では、与えられた問題だけでなく、自ら課題を設定することの大切さも伝えてきました。そうすることで、より理解が深まるのではないかと考えます」(浅田さん)。

産官学民が協働できる 討議や意見交換の場の提供

ESDを持続させるためには、企業やNPO、行政など産官学民がつながり、オーバーラップすることが必要だと考えます。様々な団体同士がつながるための場の提供、意見交換の場を設ける、そんな活動を今後も続けていきたいです。

「EPTはESDユネスコ世界会議で出された『あいち・なごや宣言』に寄り添って活動が継続できればいいと思います」(浅田さん)。



2004年には「持続可能な交通」をテーマにしたワークショップテキストを発行



ESDユネスコ世界会議では併催イベント会場内の「みんなの環境ひろば」に出展

取組紹介 ～私たちのESD～

SNP

(サスティナブル・なごや・プロモーション)チーム

事務局／平石晶代さん、西野圭一郎さん

未来をつくる種をまく ～学生の学びとESD～

学生主体で考える 持続可能な都市・なごや

「持続可能な都市なごや」を実現するために、みんなで一緒になって4つのE(環境、経済、教育、社会的公正)の視点から考えてみようという目的で2011年度から活動を始めました。現在は名古屋学芸大学のデザイン科の学生を中心に、市民や企業などが一緒になって活動しています。例えば「なごやの魅力」を再発見するツアーを企画し、それをPRするチラシや動画を作成したり、メンバーがデザインした植木鉢キットを組み立て、植物や生き物の大切さや環境問題を考えてもらう「植木鉢ワークショップ」



学生が中心になって話し合う企画会議の様子

ブ」などを行っています。

継続の秘訣はみんなに メリットがあること

学生にとっては、SNPの活動で環境活動の取組や意義を学びつつ、自ら企画や制作活動をする事で社会に向けて自分のデザインを発信することができます。さらに学外の人たちと関わりを持ち、行動力や表現力を高めることができるのも魅力のひとつです。

一方で、一緒に活動する大人たちにとっても、学生の運営パワーやアイデアが刺激となる心理的なメリットがあります。そして参



間伐材を使った組み立て式植木鉢



植木鉢ワークショップはいつも大人気



学生主体のSNPメンバー(一部)

加者もデザイン性が高く、若い人たちの企画で楽しむことができる…。

SNPに関わる人たちがお互いに利点を感じられることが、継続できている理由の一つだと思います。

未来をつくる種をまく

ESDを意識して始めたわけはありませんでしたが、振り返ればESDになっていたというのが実感です。

継続的な学びのプロセスの中で、学生も成長し、今ではイベントの企画や、運営、出展するかどうか学生が検討・判断しています。

SNPのロゴマークは、「持続可能な未来の芽吹き」が始まるイメージです。大学生が学んだ事を、ワークショップ等で子どもたちに伝え、そしてさらに次の世代へ。

地球を守る担い手が育ち続けることを願い、私たちは活動の種をまき続けたいと考えています。

取組紹介 ～私たちのESD～

おりがみプロジェクト

河野香織さん

「おりがみ」を通じて日本の文化、 環境への関心を高める



夏には、スタッフも浴衣で参加

COP10を契機に 活動の輪を広げる

2010年、名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が「想いでつなごう!おりがみアクション」誕生のきっかけでした。会議のロゴは、おりがみでできた生きもののマークでした。そこでマークに使われている生き物をおりがみで折り、未来へのメッセージを書くこの活動を思いつきました。アクションを通じ、普段環境になじみのない一般のみなさまへ生物多様性の大切さを考えてもらうことを目的としています。

アクションの内容は、おりがみ



いろいろなメッセージが書かれています

で動物や植物を折り、地球の未来を想ってメッセージを書いてもらうという幼稚園くらいの小さなお子さんにも親しみやすい簡単なことです。COP10当時20代だったプロジェクトリーダーが自ら「折り姫(おりひめ)」となって活動を推進していきました。COP10において、私たちの取組は、シンボリックな役割を果たし成功裏に終わりました。もちろん、このアクションに賛同して下さった100を超える団体、2万人を超える人々が参加して下さったからこそその結果だったのではないかと考えています。会議終了後も、環境系のイベントなどで活動を継続しています。

関心を高める第一歩は 「とにかく楽しむ」

生物多様性の大切さや環境について関心を持つ人を増やすことが私たちの役目です。いろいろな難しいこと伝えるのではなく、まずは取り組みやすいことで興味を

持ってもらうことが大切だと思っています。そのためにはまずは楽しんでもらうこと。そんなイベントを目指し、未来の地球のために何ができるか考えてもらうきっかけ作りをしています。そうして「今日折ったゾウが住む、アフリカってどんなところだろう」と、関心を寄せる人が増えてくれたら、と思っています。

こうした小さな積み重ねで、今後も多くの方に環境の関心の輪を広げていきます。

活動を広げるため 様々な団体と協力

私たちの活動はボランティアの方々の協力なしでは続けていくことができません。一過性のもので終わらない、持続可能な活動にするためにも、環境に関心の高い企業とのコラボレーションによるイベント開催などを継続していきたいです。

取組紹介 ～私たちのESD～

劇団シンデレラ

座長／フローレスともこさん

心に響け！ ミュージカルで伝えるESD

自然の大切さを 歌やセリフに乗せて

劇団は私が短大在学中の1984(昭和59)年に立ち上げました。当初はファミリーミュージカルを上演していましたが、18年ほど前に北海道・知床の自然保護活動に携わる人たちに感銘を受け、自然をテーマにした作品を上演するようになりました。生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)開催を機に、「COP10ガールズ」というユニットを組んで生物多様性を守ることの重要性を訴えました。現在は、3歳から大人まで25人の団員が日々、稽古や自然に触れ合う活



2014年7月の一宮七夕祭りで「みどりの森のシンデレラ」を上演

動に取り組んでいます。

ミュージカルを作る時は、子どもたちが現場を取材し、私が台本を書き起こします。例えば、ラムサール条約に登録された豊田市の東海丘陵湧水湿地群のごみ拾いをしながら取材した時には、「絶滅危惧種の渡り鳥さんが喜んでいてみたいだった」と子どもたちの実感をセリフにしています。実体験が盛り込まれているので、伝わりやすい部分があると思います。

地元から世界まで 広がるESDの輪

全国各地で活動する中で、他の地域の方が私たちの活動を見て劇を作るようになったり、私たちが自然環境の勉強をさせてもらったりとお互いに良い影響を受け合っています。

また、お父さんやお母さん方が「地産地消」に関心を持って地元の食材を購入するようになったりと、様々な広がりを感じてい

ます。さらに、海外公演を通じて団員と海外の子どもたちが友達になっているので、将来、この活動を通して国同士をつなぐ「大使」になってくれるのではないかと期待しています。

目指すは 世界中の子どもたちの笑顔

ESDとは「子どもの笑顔」だと思います。全ての子どもが笑っていられるような世界は、生き物や地球も笑っている世界。そんな世界を目指すことがESDだと思います。劇団シンデレラを立ち上げてから30年以上経ちますが、みんなが笑っている地球になったら、劇団を解散する時だと思っています。



豊田市で開かれた「ESDフェスタ」でのワンシーン

取組紹介 ～私たちのE S D～

特定非営利活動法人

中部リサイクル運動市民の会

副代表理事・事務局長／和喜田恵介さん

「五位(ごみ)一体」の活動が E S D への第一歩



「市民リサイクラー」が中心となって運営される「リサイクルステーション」

活動の仕組みや 場を創り出す

私たちの団体は「自分たちの地域のごみ問題は自分たちで何とかしたい」と、名古屋市内44か所の「リユース&リサイクルステーション」の運営を中心に、「エコロジーセンター Re☆創庫(りそうこ)」で子ども向けの環境教育プログラムの実践など幅広い活動をしています。

私が団体スタッフになって17年目になりますが、常に意識してきたのは、「市民のみなさんが活動に参加できるシステムと場を地域の人たちと共につくる」ということ。市民が「環境にいいことを

したい」と考えても実際に行動に起こす場がなければ意味がありませんよね。市民活動の場づくりは、行政や民間企業、メディア、NPO、それから市民のみなさんやボランティアの協力を得ながら取り組んできました。

立場や分野を越えた つながりが大切

活動を通じて実感していることは、自分たちの理想や夢を伝えて、きちんと協力をお願いすれば、立場や分野を越えて、様々な人たちが力を貸して下さるといことです。ボランティアとして参加して下さるみなさん、協力して下さる企業のみなさん、活動と広報をして下さるメディアのみなさん、得意分野が異なるNPO…。様々な人と団体がつながってきました。こうした横のつながりが、新しい仕組みや活動拠点づくりにとって欠かせないものです。特にボランティアのみなさんは熱心に活動の現場を支

えてくださるだけでなく、運営面などにも意見を出して、私たちの活動をサポートしてくれます。私たちはこのようなパートナーシップ体制を「五位(ごみ)一体」と呼んで、活動方針の一つにしています。

世界の事例にも目を向け 活動の場を広げる

ここ数年は、市民のみなさんからいただいたまだ使える不用品を販売して、その利益を環境活動や社会貢献活動に生かす「チャリティーショップ」の運営にも取り組んでいます。欧米ではNPOの資金獲得の方法として広く普及しています。今後は国内外の事例も参考に、活動の幅を広めていきたいですね。



回収拠点であり、チャリティーショップでもある「Re☆創庫あつた」



冊子「チャリティーショップへ行こう」

■ 問い合わせ TEL：052-982-9079（月～金曜 9:00～17:00）、
土・日・祝日は「Re☆創庫あつた」TEL：052-659-1007（10:00～17:00） <http://www.es-net.jp/>

取組紹介 ～私たちのESD～

一般社団法人 名古屋建設業協会

会長／山田厚志さん



2012年8月実施の夏の加子母体感バスツアー

ESDに生かす建設業者の力

業界屈指の多彩な活動

名古屋建設業協会は、名古屋市内に本社を置く建設業者が、愛知県、名古屋市の指導の下に一致団結して1977(昭和52)年に発足、現在約170社が所属しています。これまで地域の環境美化など様々な公益活動に取り組んできましたが、活動の多彩さは全国の業界団体の中でもトップクラスではないかと思っています。

例えば、なごや環境大学で10年以上に渡って講座を開催したり、市内の小学校で防災訓練を実施したりしています。また、災



被災地に貸し出す資器材を保管するレスキューストックヤードと、地域の子ども達が倉庫に絵を描くイベントを開催

害時の被災者支援活動に取り組むNPO法人レスキューストックヤードを協会のビル内に誘致し、東北の支援活動にも取り組んでいます。

ESDの概念が幅広い活動にマッチ

私たちは、ごみを減らす取り組みから始め、その後、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)を経験するなど、幅広く活動を展開してきましたが、ESDを知ったことで活動がしやすくなりました。「防災」など、私たちの持つ技術やノウハウを生かせる活動も範囲に入るので、一回り大きな上着を与えられたかのようです。ESD活動を率先できる業界団体になれるところまでできていると感じています。

そろばんずくの貢献で企業も社会もwin-win

ESDとは、一つ一つの企業の持続可能性が実現していることだ

と思っています。ESDに取り組むためには、企業が存続することが大前提。ただ単に社会に貢献する活動ではなく、事業の利益につながることも必要だと思っています。そのことを私は、「そろばんずくのCSR(企業の社会的責任)」と言っています。我々も価値を見だし、社会にとっても価値のある活動であればこそ続けることができるからです。

その上で、一人ひとりが「どうすれば持続可能な開発を実現できるか」を考えられるようになると思います。私たちの仕事は「開発」に携わり、自然を壊すようなイメージを持たれがちですが、「環境を保全する」という観点で地域のために仕事に取り組むことが重要です。そのためにも活動の経験を、日々の仕事に生かしていきたいです。

取組紹介 ～私たちのESD～

名古屋わかもの会議

代表／水野翔太さん

若い世代のパワーで よりよい社会に

若者同士で 議論できる場に

愛知・名古屋を盛り上げることをコンセプトに、東海地方の高校生や大学生15人が集まって2013年に発足しました。きっかけは、若者同士、政治や社会問題を話し合う場を作りたいと思ったこと。これまで3回の会議を開催し、北海道から沖縄まで100人以上の高校生や大学生が愛知・名古屋の活性化策や防災な



「ESDユネスコ世界会議半年前イベント」にも参加

どについて議論を重ねました。具体的には若者による自治会を作ろうという案などが生まれていて、今後もSNSなどで参加を呼び掛けながら、会議を開催していく予定です。

会議の活動を通して ESDを分かりやすく

高校時代、生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)のボランティアに参加しました。そのとき、環境問題を考えるには、環境のことだけではなく、政治や経済のことも考えなければならないと実感。その後、その考え方がESDにつながることを知りました。わかもの会議自体



普段のミーティングは和やかな雰囲気で行われています



第1回目の会議は学生や企業の関係者ら約150人が参加

もESDにつながると考えており、若者の視点でESDを分かりやすく伝える一翼を担えればいいなとも考えています。

また、私自身、ESDとは「人と人のつながり」だと考えています。例えば、社会問題を解決しようとする、自分たちの世代だけではなく、大人の協力も必要です。また、自分たちの次の世代の力も重要になってきます。横だけでなく縦に人がつながることも大切にしながら活動していきたいです。

生まれるアイデア 行政へ反映したい

私たち若い世代が呼び掛けると、同じ世代が反応してくれるということを実感しているので、これからも同世代の人たちにわかもの会議への参加などを積極的に呼び掛けたいです。今後は具体的な活性化策などを提案し、市政や県政に反映させるような枠組みをつくりたいと思っています。

取組紹介 ～私たちのESD～

山崎川グリーンマップ

代表／大矢美紀さん

世代を越えたつながりが
活動の広がりを生む子どもと保護者、さらに
地域のお年寄りも協働

愛・地球博が開催された2005年に、瑞穂区の子ども会から誕生した団体です。子ども会主体で行った地域の環境の良いところ、悪いところを地図に落とすグリーンマップの活動により、山崎川周辺の生きものの半数以上が外来種に置き換わっていることに気づきました。そのことに危機感を覚え、在来種保護のための外来種防除、啓蒙活動としての定期的な観察会を始めました。その後、一人でも多くの人



地元の小・中学生が取材し、文章を書いた「山崎川いま・むかし」

に活動の趣旨を理解してもらえるように、お年寄りから昔の山崎川の様子聞き取り調査を行い、冊子にまとめる活動なども行うようになりました。

また、私たちは「伊勢・三河湾流域ネットワーク」との共催で「味わって知る わたしたちの海」という講座を開催しています。伊勢湾、三河湾で獲れたものを食べることで、魚や貝類などを育む「海」という環境の大切さを感じ取ることができます。

様々なつながりが
学びのきっかけに

この活動を通じて、様々なつながりが生まれました。地域の



「味わって知るわたしたちの海」では、県内各所から専門家を招いて講座を開くことも



庄内川・新川・日光川が流れ込む伊勢湾奥部に残されている干潟

お年寄り、山崎川が流れ着く伊勢湾の環境保全に取り組む団体、山崎川の流域にある学校など、様々な属性の人が参加しています。

さらには、川を多面的にとらえる視点も養われたように思います。「川には多様な生物が住み、恩恵を受けている」、「川は多量の雨水や生活水を海へと運ぶ支流」、「上流で雨が降ると下流にあたるこの地域はいつも増水する」といったことなど、様々な角度から山崎川を見るようになりました。意識して取り組んできたものではありませんが、結果として、持続可能な社会に向けた活動になっていたのかもしれない。

10年前の発足時の保護者や中学生になった子どもたちが週末のイベントなどに参加してくれます。和やかに楽しみながら活動を継続していきたいですね。

取組紹介 ～私たちのESD～

特定非営利活動法人 レスキューストックヤード
事務局長／浜田ゆうさん

災害に強いまちづくり、 きっかけは阪神・淡路大震災からの 学び合い



宮城県七ヶ浜町で「寄り添う」活動を実践

経験から学んだ教訓活かし 災害に強いまちづくり

レスキューストックヤード(RSY)は、過去の経験から学んだ教訓を活かし災害に強い街づくりに向けた取組を進めています。大きく4つの理念があり、それぞれの事業や活動が位置づけられています。

災害時には、現場で一人ひとりの声に耳を傾け、息長く寄り添い続ける「寄り添う」活動を行っています。また、平常時には普段から隣近所で助け合える関係づくりを目指す「日常から学び合う」活動、お年寄りや障がい者などを細かくケアできる仕組み作りの「最後のひとりにこだわる」活動、さらに全国各地のNPOなどと非常時に連携するネットワークづくりを「ひろげる」活動を行っています。

これらの4つの理念に沿って、市民参加による災害救助ボランティアの養成、ボランティアの地

域コミュニティ再興、緊急時に生かすリサイクル活動、緊急時の積極的な支援活動などを展開しています。

きっかけは、阪神・淡路 大震災からの学び合い

阪神・淡路大震災が発生した1995年、現代表理事の栗田暢之が被災地にボランティア活動をした際に、ボランティアだから築ける人と人との信頼関係の大切さに気づき、「震災から学ぶボランティアネットの会」を結成して、被災地への訪問や機関誌の発行、不定期の学習会などを行っていました。

これらの体験や学びあいを重ねるとともに、2000年の東海豪雨でのボランティア活動での経験から、防災は、平常時の備えが重要であると考えようになりました。そこで、人もモノもカネも「助ける＝レスキュー」のために「蓄える＝ストック」「場＝ヤード」が必要だという「レスキュースト

ックヤード構想」が生まれました。

当初、平常時にリサイクル品として集めたモノを災害時に被災地へ届ける仕組みをつくるイメージでした。この構想を実現するため、レスキューストックヤードとして2002年にNPO法人化を行い、現在に至っています。

東日本大震災では、宮城県七ヶ浜町での「ボランティアきずな館」を拠点とする支援活動を行い、4年経った今も継続しています。

緊急時のみならず、平常時から人々が助け合い、支えあうボランティア精神豊かな社会を目指し、これからも挑戦を続けていきたいと考えています。



「日常から学びあう」ことの大切さを伝える市民講座を運営



発 行 名古屋市環境局 環境企画部 環境企画課

編 集 名古屋市環境局 環境企画部 環境企画課、環境活動推進課

「なごや環境大学」実行委員会 E S D 推進チーム

新海洋子、長谷川明子、松本イズミ、山田厚志、杉野実、平石晶代、根岸恵子、千頭聡

2015 年 3 月



環境に配慮し、古紙パルプを含む再生紙とベジタブルオイルインクを使用しています。